

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

SYNTHESIS

2007



明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 2007



目次

年報創刊に当たって

1. 研究所概要	1
2. プロジェクト研究の進捗状況・成果の概要	7
● 幼児および中高年齢者の体力特性と運動処方について 黒川貞生, 森田恭光	
● 和英語林集成の研究 嶋田彩司, 大森洋子, 宮坂弥代生, 木村一, 境田稔信	
● グローバル化とディアスポラ 佐藤アヤ子, 川俣優, 竹尾茂樹	
● 日本の貴族文化の研究 武光誠, 池上康夫, 田村航	
● 大学が地域社会に対して有効なヘルスプロモーションを実現できるか? 亀ヶ谷純一, 久保隆彦	
● メディアの近代 ～記憶のかたち～ 原宏之, 磯崎康太郎	
3. 事業の進捗状況・成果の概要	25
● 公開講座報告	
● FD関連活動報告	
● 戸塚祭り報告	
4. 教育・研究業績の概要	51

年報創刊に当たって

明治学院大学 教養教育センター
付属研究所所長：鈴木 義久

2002年4月1日の教養教育センター発足よりこの2008年3月31日で、早くもまる6年が経過しようとしています。当教養教育センター付属研究所も、教養教育センターの付属教育・研究機関として、センター所属の専任教員を始めとする所員の諸活動を促進し、また支援してきました。秋の明治学院大学公開講座、プロジェクト研究を始め、その活動記録を主に報告書や論文などの体裁で年一度の定期刊行物に納め、世に送り出してきました。

振り返ってみると、教養教育センターが発刊する論叢の方は発足1年目から、教養教育センターの前身である旧一般教育部の付属研究所が長年刊行してきた論叢『総合科学研究』の軒をそのままお借りする形で論文集を発表していますが——この論叢は2004年度から新たに『明治学院大学リベラル・アーツ論叢』と称して創刊されました。——教養教育センター発足後に旧外国語研究所を吸収合併する形で設立された教養教育センター付属研究所の機関誌が最初に発行されたのは、論叢に遅れること2年目の2004年度になってからでした。

その機関誌の名称は、本学院第二代総理だった井深梶之助が「修養（教養）」の意で使用した言葉を借用して『カルチュラル』とし、上述の論叢の版がA5であったのに対し、一回り大きなサイズのB5版となりました。また装丁も、新設の教養教育センター付属研究所に相応しい、モダンで斬新な創刊号となりました。

そして、第2号、第3号、第4号と、この『カルチュラル』は年刊誌として号を順調に重ねてゆきましたが、2007年度、所員の総意で第5号に替わり、新たに『明治学院大学教養教育センター付属研究所年報 *SYNTHESIS*』という名称で、教養教育センター付属研究所年報として発刊の運びに至りました。この背景には、2006年度に『明治学院大学リベラル・アーツ論叢』と『カルチュラル』を一本化し、新たに『明治学院大学教養教育センター紀要 カルチュラル』が発刊され、結果的に付属研究所の諸活動を報告する機関誌がなくなったこともあります。

さて、この『*SYNTHESIS*』は「統合」の意ですが、将来的には単なる所員の諸活動の記録報告にとどまらず、多様な内容が納まる年刊誌に成長するよう願いを込めて付けられた名称です。

教養教育センター内外の、さらに広く明治学院大学外のかたがたのご批判にも耐えうるような良質の機関誌（年報）として、充実させていきたいと考えています。

Section 1

明治学院大学 教養教育センター附属研究所概要

2007年度明治学院大学 教養教育センター付属研究所組織

所長：鈴木義久

主任：黒川貞生，高桑光徳

所員：池上康夫，大森洋子，亀ヶ谷純一，川俣優，久保隆彦，佐藤アヤ子，佐藤寧，
嶋田彩司，武光誠，永野茂洋，花田宇秋，森田恭光，石渡周二，原宏之，
三角明子，渡辺祐子，Varden,J.K，猪瀬浩平，植木献，福山勝也，
磯崎康太郎，金珍娥，Mathis,M， Connolly,M （以上，教養教育センター），
熊井茂行（国際学部）
（なお，荒川道夫氏とJ.M.Roger氏は逝去されたので所員から外してある）

教学補佐：岩間仁子 三股かすみ 石濱裕美

研究所運営委員会

1. カルチュラル編集担当 渡辺祐子（チーフ） 池上康夫 武光誠 黒川貞生
磯崎康太郎
2. 公開講座担当 福山勝也（チーフ） 佐藤アヤ子 花田宇秋 原宏之
Varden,J.K
3. ガイドブック編集担当 石渡周二（チーフ） 植木献 金珍娥 Mathis.M
4. FD活動： 永野茂洋（チーフ） 佐藤寧 亀ヶ谷純一 三角明子
高桑光徳

研究活動

2007年度研究プロジェクト（* = 代表者）

- 「幼児および中高年齢者の体力特性と運動処方について」（継続）
黒川貞生*，森田恭光
- 「和英語林集成の研究」
嶋田彩司*，大森洋子，宮坂弥代生（本学非常勤講師），
木村一（学外研究者），境田稔信（学外研究者）
- 「グローバル化とディアスポラ」
佐藤アヤ子*，川俣優，竹尾茂樹

- 「日本の貴族文化の研究」
武光誠*，池上康夫，田村航（中世史研究者）
- 「大学が地域社会に対して有効なヘルスプロモーションを実現できるか？」
亀ヶ谷純一*，久保隆彦
- 「メディアの近代—記憶のかたち」
原宏之*，磯崎康太郎

月例研究報告会

- 6月13日 (水) 荒川道夫氏
「ガンと診断されて」中止
- 7月 4日 (水) 猪瀬浩平氏
「社会的排除から包摂へ：見沼田んぼ福祉農園からのボランティア学」
- 11月14日 (水) 植木献氏
「契約とコモンセンス——リンゼイのデモクラシー理論における伝統」
- 12月13日 (水) 森田恭光氏
「骨粗鬆症の理解と予防」

教育活動

<TOEIC-IP及びTOEIC集中講座>

- 第1回試験 5月16日 (水) 横浜 5月19日 (土) 白金 計 48名受験
- 第2回試験 6月16日 (土) 白金 6月20日 (水) 横浜 計113名受験
- 第3回試験 10月20日 (土) 白金 10月24日 (水) 横浜 計135名受験
- 第4回試験 12月15日 (土) 白金 12月19日 (水) 横浜 計151名受験
- 春期集中講座 5月12日 (土)～6月9日 (土) 白金 土曜3・4限5回
長谷川剛氏 19名受講
- 夏期集中講座 8月 1日 (水)～8月 9日 (水) 白金2・3限 長谷川剛氏 16名受講
9月 3日 (月)～9月11日 (水) 横浜2・3限 中村道生氏 11名受講
- 春季集中講座 2月25日 (月)～3月 4日 (水) 横浜2・3限 中村道生氏 11名受講
3月 6日 (水)～3月14日 (金) 白金2・3限 長谷川剛氏 24名受講

<TOEFL-ITP>

- 第1回試験 6月27日 (水) 横浜 計69名受験
- 第2回試験 11月21日 (水) 横浜 31名受験

<講 座>

- ドイツ語検定講座
2007年4月13日(金)～2008年1月11日(金) 金曜5限 白金 小山田豊氏
14名受講

<集中講座>

- DELEスペイン語能力試験講座
文法・語彙編 9月3日(月)～9月7日(金) 白金 仲道慎治氏 27名受講
実践編 9月3日(月)～9月7日(金) 白金 Eugenio del Prado氏 16名受講
- 夏休手話講座
9月4日～9月10日(月) 宮本真紀氏 20名受講

行 事

<公開講演会>

- 4月19日(木) 白金 講演者 天野祐吉氏・佐藤可士和氏
「天野祐吉・佐藤可士和客員教授就任記念会」
- 4月24日(火) 横浜 講演者 陣内大蔵氏
「僕と歌と教会」
- 5月19日(土) 白金 講演者 佐野章二氏
「BIG ISSUEの軌跡とこれから」
- 6月 1日(金) 横浜 講演者 池谷薫氏
「蟻の兵隊上映会」
- 2月 2日(土) 横浜 講演者 田中每実氏
「FDと日常的教育改善—公開授業をめぐって—」
- 3月 8日(土) 白金 講演者 今泉光司氏
「今を生きのびる方法」
—「アボン・小さい家」上映とディスカッション—
- 3月21日(金) 白金 講演者 吉田研作氏
「外国語教育の基本的考え方—教室への応用」

＜連続公開講演会＞

テーマ：地球規模の課題と向き合う

12月5日 (水) 横浜 講演者 前田正子氏
「地域から世界を考える～横浜からできること～」

12月6日 (木) 横浜 講演者 国安法夫氏
「世界の食糧問題に取り組むFAOの活動」

12月7日 (金) 横浜 講演者 松本淳氏
「2008年横浜にアフリカが来る！」

＜大学公開講座＞

テーマ「グレートワークス―世界を変えた20世紀の偉大な業績」

9月29日 (土) 講演者 佐野直哉氏
「フロイト 愛することと働くこと 今フロイトを読んでもらう」

10月 6日 (土) 講演者 佐野哲也氏
「生まれつきの言語能力の研究：チョムスキーが拓いた新境地」

10月13日 (土) 講演者 嶋田彩司氏
「ヘボンの仕事：100年前の日本語革命」

10月20日 (土) 講演者 柳父圀近氏
「歴史と現代―マックス・ウェーバーの眼差し」

10月27日 (土) 講演者 柘植あづみ氏
「遺伝子技術と社会：ワトソンの業績と功罪」

刊 行

- 『よこはま茶話』8号 7月刊行
- 『ヘボン塾ガイドブック』
- 『初習外国語選択ガイドブック』 10月刊行
- 明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 *SYNTHESIS 2007* 3月刊行

Section 2

プロジェクト研究の進捗状況・成果の概要

幼児および中高年齢者の体力特性と運動処方について

黒川貞生¹⁾，森田恭光¹⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター

目 的

我が国をはじめとする先進諸国においては、今世紀半ばには高齢者の割合が30%を越える超高齢化社会に突入すると推測されている。このような状況は、人類が誕生して以来、一度も直面したことがない。超高齢化社会になっても、医療寿命と健康寿命の差（寝たきり期間）を短くできればQOL（Quality of Life）を高く保ちつつ、高齢者のproductivityを実現できると考えられる。そのための必要条件としては、健康を維持・増進させることが本質的であり、健康度・体力を向上させるより効果的な運動処方の早急な開発が期待されている。近年、高齢者においても有酸素的および無酸素的トレーニングを適切に行えば効果が得られるという研究が多く報告されはじめている。したがって、高齢期からでも適切なトレーニングを実施すれば、健康度・体力の低下をより緩やかにでき、それは健康寿命を延長させる、ひいては寝たきり期間を短くできる可能性が考えられる。また、青年期における健康度・体力レベルのピークを極力高めておくことも健康寿命をより長くするためには大切なことである。

一方で、近年、子どもの割合が低下し、少子化社会をむかえている。子ども達を取り巻く環境は大きく変化し、子どもの健全な発達を願う立場からみて危惧する問題が山積している。特に、乳幼児期から発育期の子ども達の体力の低下は顕著で、大きな社会問題となっている。このような現状を鑑み、多くの健康・スポーツ科学の研究者は、次世代を担う子ども達がどのくらいの運動をどのくらい行えばよいかについて検討することを緊急の課題の一つと位置づけるようになった。しかし、乳幼児期から発育期の子どもを対象に身体資源（筋形態、筋機能の年齢に伴う発育・発達、性差等）を検討した研究は少なく、データの蓄積は不十分と思われる。身体を構成する筋の発育・発達に関わる研究はこれまでも数多く行われてきた。しかし、それらのほとんどは、7歳以上の被検者を対象に実施されている。

そこで、本研究では、3～6才児を被検者として、筋および筋力の発育・発達について検討することを目的とした。

方 法

1. 被験者

発育上、特に問題の見られない健康な3～6才（36ヶ月～83ヶ月齢）の幼児（男児：101名、女児：172名）であった。なお、測定に先立ち、保護者、保育園・幼稚園関係者に対して研究の主旨と方法、および測定の安全性について十分に説明し、本研究への同意を得た。

2. 測定内容

本研究では、形態、大腿前・後部の筋厚、筋力、立ち幅跳びの距離を測定した(図1)。それらの測定手順は、以下に示す通りであった。

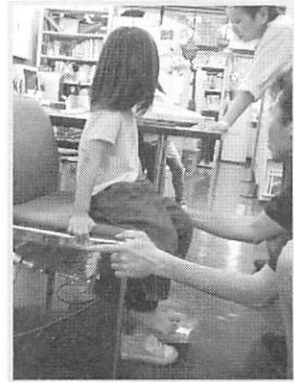
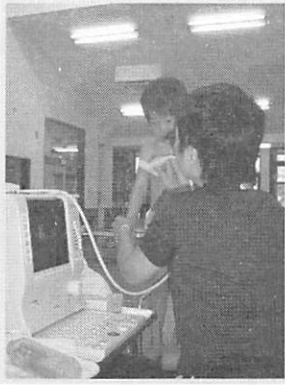


図1. 測定風景

1) 形態測定

身長および体重に加え、大腿長、下腿長、大腿囲(筋厚測定位置)について測定した。なお、大転子点から脛骨点までの距離を大腿長として測定した。

2) 筋厚の測定

Bモード超音波診断装置(ALOKA社製)を用いて、右大腿の前部および後部の筋厚を測定した。測定時の超音波発振周波数は5MHzであり、被験者の姿勢は立位とした。測定箇所は、大転子点より大腿長の遠位50%の位置とした。得られた超音波画像に基づき、皮下脂肪と筋との境界から大腿骨までを筋厚として測定した。

3) 筋力の測定

特別に作成した測定装置を用いて、等尺性膝伸展および膝屈曲時のトルクを測定した。測定時の被験者の姿勢は椅座位であり、膝関節90度において力発揮を行わせた。記録されたトルク曲線のなかで極大値（ピークトルク）を採用した。両動作とも試行は2回とし、2回目に初回を上回る値が記録された場合には、3試行目を実施した。各試行に発揮された最大値を個人の代表値として採用した。

4) 筋体積当たりのトルクの算出

トルクは筋断面積より筋体積と強い相関関係を示す（Fukunaga et al. 2001）。それゆえ、本研究では、単位筋量当たりのトルクを算出するにあたり、まず、筋厚の二乗値に大腿長を掛け合わせるにより筋体積指標を算出した。そして、それに対するトルクの比（T/MV）を単位筋量当たりのトルクに相当する指標として算出した。

5) 跳および走能力

立幅跳の距離および10m走のタイムを測定した。10m走の成績は、距離をタイムで除することにより、平均走速度として表した。

結果と考察

形態：

身長および体重は男児が女児よりも高い値を示す傾向であった。しかし、月齢別の統計処理において有意差が認められたのは4歳児および5歳児の身長（男児＞女児）、4歳児の体重（男児＞女児）のみであった（図2）。

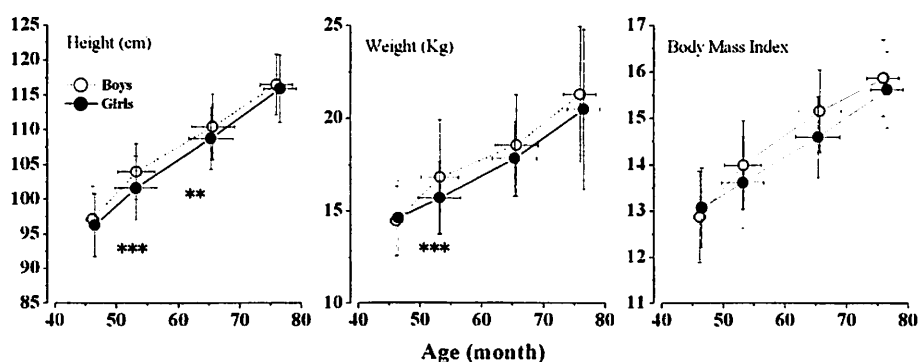


図2. 身長、体重およびBMIの発育変化

筋厚：

総じて、男児の筋厚に比較して女児のそれは低い値を示す傾向ではあった。しかし、統計的に有意差が認められたのは、5歳児の前腕前部（男児＞女児）、4歳児および5歳児

の上腕後部のみであった(図3)。

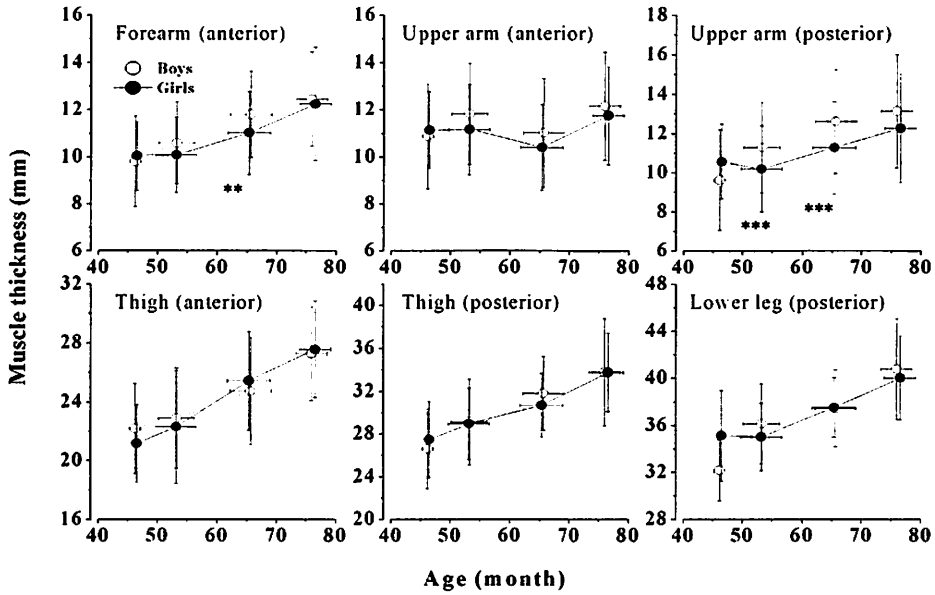


図3. 上肢および下肢筋群の筋厚の発達変化

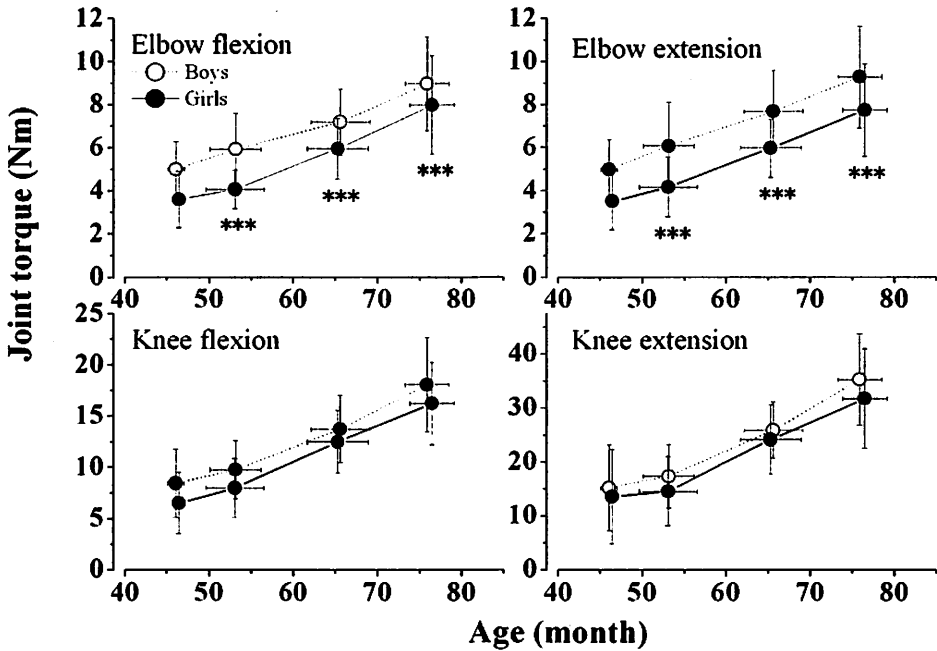


図4. 肘関節屈曲・伸展トルクおよび膝関節屈曲・伸展トルクの発達変化

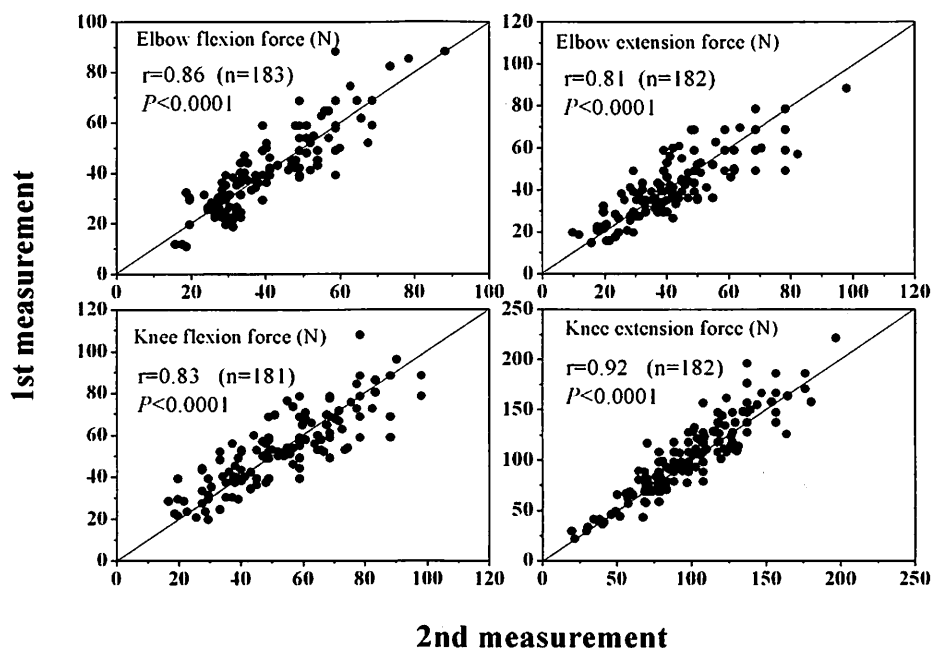


図5. 肘関節屈曲・伸展トルクおよび膝関節屈曲・伸展トルクの測定における再現性

筋力：肘関節屈曲・伸展トルクおよび膝関節屈曲・伸展トルクは男児および女児共に発育に伴って顕著に増加した。肘関節屈曲・伸展トルクでは、4,5,6歳児で有意な性差が認められた。しかし、膝関節屈曲・伸展トルクについては、性差が認められなかった(図4)。

筋力：

肘関節屈曲・伸展力および膝関節屈曲・伸展力の測定において、いずれも再現性が確認された(図5)。

各筋群について、筋力から換算されたトルクを筋体積指数(0.5×筋厚の2乗とセグメント長の積)で除すことにより、固有筋力インデックスを求めた。その結果、いずれの筋群においても、固有筋力インデックスは発育と共に増加した。この原因として、神経系の発達が影響していることが考えられた。

固有筋力インデックスは、肘関節屈筋群の4歳児、膝関節屈筋群の5歳児、膝関節伸筋群の6歳児においてのみ、有意な性差が認められた。幼児期の形態と機能の発育・発達をより明らかにするには、さらに被検者数を増やすことが必要である。

和英語林集成の研究 ～ 明治期稀覯辞書研究 ～

嶋田彩司¹⁾，大森洋子¹⁾，宮坂弥代生²⁾，木村一³⁾，境田稔信³⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター ²⁾ 明治学院大学 非常勤講師 ³⁾ 学外研究者

『和英語林集成』

◆初版 1867年（慶應3）

出版地：横浜

印刷：上海 American Presbyterian Mission Press（美華書院）

発行部数：1200部

日本最初の和英辞典。同時代の各種辞書に比べると体裁・内容とも比類のない内容を有する。先行する辞書が少ない中、直接へボンが出逢った人々の言葉が記録され、幕末の日本語を良く集めている。このため英語で書かれた国語辞典としても貴重である。見出し語は和英20772語、英和が10030語。

◆再版 1872年（明治5）

発行部数：3000部

和英22949語、英和14266語

第三版 1886年（明治19）

出版：丸善商社書店

出版地：東京

印刷：横浜R. MEIKLEJOHN&Co

版權を丸善に譲っての出版。和英35618語、英和15697語であり、和英に1万2000語を超える追加がある。この改訂により新しい時代の言葉とともに古事記や万葉集などの古語も取り入れ、総合的な辞書となった。見出しのローマ字は現在「へボン式」と称されている。この辞書の丸善の予約部数は1万8000部と言う驚異的な数字であったという。この版以後第九版まで出版されるが、それらは一部の訂正に留まる。

和英語林集成に関わるプロジェクト研究は、研究員個々の調査および研究の成果を、定期的に開催する研究会（平文辞書研究会）で報告し、討議を経てさらに各自が研究課題をもちかえるという方式を積み重ねてきた。

研究テーマは、大別して次の4点に集約することができる。

1. 和英語林集成の成立に関わる研究
2. 近代国語辞書の歴史研究
3. 和英語林集成をはじめとする明治期出版物の印刷に関わる研究

4. ヘボンおよびその援助者の人物研究

以下、現時点での研究成果の概略を記す。(なお、1~3については、木村一、境田稔信、宮坂弥代生の各氏による発表稿を嶋田が要約した)

1. 和英語林集成の成立に関わる研究

和英語林集成には「原稿」が存している(明治学院大学図書館蔵)。成立年は不明、ノート1冊(499頁)分にAからkaneまでの見出し語6,735語を収録し、それに対する語義などを記している。ヘボンは「原稿」作成において、漢字表記や見出し語、用例などの面で、森楓齋の『雅俗幼学新書』(唐話混入の節用集的辞書)を用いていることが、木村一によって報告された。

初版については、イエズス会宣教師の手になる『日葡辞書』やメドハーストのAn English and Japanese and Japanese and English Vocabularyが用いられたことが知られている。加えて、江戸後期の節用集類の参看も指摘されている。編纂の経緯については序文に記されているところであるが、今後も先行辞書類との具体的な影響関係の裏付けが課題となっている。

再版以降については、増補された収録語彙が、新しく流入した西洋文化との関わりで注目される。これらの研究は、デジタルアーカイブの完成によってさらに進展が期待されるところである。

2. 近代国語辞書の歴史研究

近代国語辞書はその形態によって以下のように分類することが可能である。

- 製本……和装本、洋装本(仮製本・本製本)
- 印刷……木版、銅版・石版、活版、オフセット
- 配列……節用集方式、いろは順、五十音順、アルファベット順

研究会では、次の主として明治期の国語辞書について、その特長や影響関係の考察をおこなった(詳細は割愛する)。

- 物集 高見……『日本小辞典』(明11)、『ことばのはやし』(明22)、『日本語大辞林』(明27)
- 近藤 真琴……『ことばのその』(明18)
- 高橋 五郎……『漢英対照 いろは辞典』(明20~21)、『和漢雅俗 いろは辞典』(明22)、『増訂二版和漢雅俗 いろは辞典』(明26)等
- 大槻 文彦……『日本辞書 言海』(明22~24)、『大言海』(昭7~12)
- 山田 美妙……『日本大辞書』(明25~26)
- 大和田建樹……『日本大辞典』(明29)、『日本小辞典』(明30)
- 落合 直文……『日本大辞典 ことばの泉』(明31~32)、同大增訂版補遺(明41)、

『日本大辞典 言泉』（大10～昭4）

- 齋藤 精輔……『帝国大辞典』（明29）、『日本新辞林』（明30）等
- 金沢庄三郎……『辞林』（明40）等

3. 和英語林集成をはじめとする明治期出版物の印刷に関わる研究

宣教師たちは、キリスト教布教に必要な聖書や小冊子を印刷するために、布教先で印刷所（ミッションプレス）を開設した。これにより19世紀東アジアに金属活字を用いる活版印刷技術が伝えられた。活版印刷は携帯に便利であること、再利用が可能であること、摩耗が少ないこと等の点ですぐれた印刷技術であるということが出来る。

和英語林集成と関わりのふかい美華書館（American Presbyterian Mission Press）は、1844年2月、マカオにて華英校書房として開設され、同45年7月、寧波に移転、華花聖経書房と改称、60年には上海に移転し、美華書館となった。

1869年、オランダ通詞本木昌造はフルベッキの斡旋により、美華書館責任者であるウイリアム・ガンプルを長崎に招聘する。日本における活字母型の製作、活字の鑄造・印刷の先駆者とされている。

以上の経緯をふまえつつ、今後は布教政策と印刷所の関わりや近代活版印刷が東アジア社会にもたらしたものについての研究を進めてゆく。

4. ヘボンおよびその援助者の人物研究

ヘボンの業績等については、別頁（市民講座報告）に略記した。参照されたい。

ヘボンの和英語林集成編纂に関わる援助者として、もっとも興味深い人物は岸田吟香である。吟香は眼病治療が縁でヘボンと知り合い、『和英語林集成』のため、語彙蒐集、版下作成等に協力することとなる。吟香の支援なくして和英語林集成は成り立ち得なかったといってもよい。また、吟香はこれ以外にもさまざまな分野で活躍した。近代日本黎明期在野の傑物ともいえる。

- 目薬「精鑄水」を販売する
- 海外新聞を翻訳して発行。「横浜新報もしほ草」創刊し、東京日日新聞主筆として従軍記事等に健筆をふるう
- 日中間の通商、文化交流に尽力する
- 西洋医療の普及、漢方薬の普及につとめる
- 楽善会訓盲院（現筑波大盲学校）を開設する

等の事業で知られている。岸田劉生の父親としても名高い。

嶋田は、岸田吟香記念館（岡山県美咲町）等において資料蒐集にあたっている。

グローバル化とディアスポラ

佐藤アヤ子¹⁾，川俣優¹⁾，竹尾茂樹²⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター ²⁾ 明治学院大学 国際学部

グローバル化は新ディアスポラを生み出した，と言われている。ディアスポラとはギリシャ語で「散らされたもの」という意味の言葉で，従来はある特定民族の歴史（過去）との関連で語られることが多かった。本学で2005年11月に開催したシンポジウムで，アメリカのRutgers大学のBrent Hayes Edwards教授は，特定民族の歴史との関連で語られることの多いディアスポラという概念に新たな解釈を与えることによって，グローバル化にたいする批判的考察の端緒を見出すことができる，と論じた。

「ディアスポラの未来」の発表の中で，エドワーズ教授は，アフリカ系アメリカ人の作家Langston Hughesの1937年のバラード詩，“Letter from Spain”の読解を通じて，新たな「ディアスポラの詩学」を提出しようと試みる。スペイン内乱のさなか，敵味方に分かれて戦う北アフリカ出身の黒人兵士たちに向けて書かれたこの詩が目指すのは，離散した「同胞たち」を糾弾することでも放免することでもない，それはむしろ，他者の他性に心に向け，他なるものを他なるままに抱擁しようと努めることであり，それによってディアスポラの責任が果たされるのだ，とエドワーズ教授は主張する。エドワーズ教授はさらに，ヒューズのこの考えの背景には，彼が同時期に翻訳を試みていたFederico García LorcaのGypsy Ballads（『ジプシー歌集』1928）に実践される「絶対的的他者」への眼差し，「他テキスト」への間接的言及があることを，綿密なロルカ読解によって明らかにする。ヒューズ，ロルカ両者に共通するのは，グローバル化という，市場経済の発展拡大によってもたらされる均一化，標準化とも，あるいは人種の名の下での同盟とも異なる，友愛にもとづく新たな普遍性への希望なのだとエドワーズは結論する。

グローバル化現象による移動の容易さから，エスニック・バックグラウンドを持つ作家・作品の台頭が昨今多くの国々で目立っている。フランス語系カナダ人作家Wajdi Mouawadもその一人である。ムアワドはレバノンに生まれ，フランスを經由してカナダのモントリオールに移住してきた新移民である。アメリカ，カナダ，オーストラリア，フランスなどの新ディアスポラの作家たちが創る作品に，新しい文学動向を探ることが本プロジェクトのねらいである。

2007年度は十分な活動ができなかったが，次年度に向け新たな準備を進めている。

日本の貴族文化の研究

武光誠¹⁾，池上康夫¹⁾，田村航²⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター ²⁾ 明治学院大学 非常勤講師

I. 公家法

よく知られているように、日本の国家法は中国の律令を手本に作られている。それは秦漢代にできたもので、長年の国内での発展をふまえたうえで、日本に取り入れられた。

この国家法をもとに太政官制度ができたわけであるが、その議政官の兼官ということがだいたいな手がかりとなる。『令集解』には、いくつかその特性を示唆する記事がみられるのである。また、中国律令は、『周礼』の六官をふまえており、六官がどう太政官とかかわるかも重要である。

II. 世阿弥の見た王朝

文化史や文芸史の視点から日本の王朝を見ようとした場合、現代から直接その時代に光を当てることはむつかしい気がする。平安から鎌倉への過渡期を生きた藤原定家などの新古今歌人ですら、王朝をもはやうしなわれた精神世界の故郷としてとらえるしかなかった。その意味で定家はまぎれもない中世人であるが、多くの中世の文芸や芸能はうしなわれた王朝への回想の地平の上に成立っているのではないだろうか。また別な言い方をすると、中世は王朝の文化の解釈と再構成の時代だとも呼べるのである。

そのような前提に立って、室町時代初期の能作者世阿弥が王朝の貴族文化をどのように摂取しその作劇に取り入れていったかという問題について考察した。新古今の歌人である定家と大和の猿楽座の役者であった世阿弥を、同じ中世の文化人としてとらえるにはふたりの境遇や生きた時代は余りにかけ離れすぎている。しかし、定家の和歌にみる物語的・劇的な手法と、世阿弥が「井筒」などの代表的な夢幻能などに虚構化した作能方法には少なからぬ共通点があるように思えてならない。定家は屏風絵などの歌の取合せにおいて、伊勢物語や源氏物語の恋を再構成してみせた。そこには言うまでもなく、和歌の家に生まれ俊成を父に持つ定家の王朝文芸の教養が素地にある。世阿弥もまた伊勢物語などを典拠とし、古歌や古文をたくみに応用した流麗な詩劇を創りあげたが、はたしてその教養は誰からどのようにして伝えられたものであろうか。父親阿弥が貴人の賞玩に堪えうる教育を与えたこと、また北朝公家の代表格である二条良基による和歌や古典の薫陶などが考えられるが、そこでの世阿弥の教養の質に対する問いかけがこの研究のテーマに他ならない。

能「井筒」の創作に際して世阿弥はいかなる「伊勢」をその台本作成に用いたのだろうか。能の詞章の具体的な考察から、鎌倉時代から南北朝時代に成立した伊勢の注釈書（いわゆる伊勢古注）をもとにしているという指摘はすでにある（堀口康生氏「待つ女—『井筒』の手法」）。『冷泉家伊勢物語抄』や『和歌知頭抄』などがそれにあたるが、世阿弥や金春禅竹が「井筒」や「杜若」などの曲を構想するに、中世の伊勢物語理解によっていることは間違いないのである。中世という時代は他ならない注釈の時代であり、とりわけ冷泉家などの歌の家においては、日本の文芸の源流である古今集や伊勢物語を解釈しそれを後代に伝えてゆくことを最大の使命としていた。王朝という野に咲いた花を中世という花器に活けて、虚構の「花」を永遠化してゆく。新古今歌人の和歌でのいとなみと同じように、世阿弥もまた王朝の物語を手折りながら夢幻能というあらたな器に開花させてみせたのである。

以上、そのテーマの大きさゆえに本研究は端緒についたばかりという他ない。さらなる継続において、成果を得たいと念じている。

大学が地域社会に対して有効なヘルスプロモーションを実現できるか？

亀ヶ谷純一¹⁾，久保隆彦¹⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター

我が国は2007年に大学全入時代に突入し，進学する大学を選ばなければ誰しものが合格できる。もちろん，これは理論上の話であって，全国の大学に進学希望者が等しく分散されるわけではないので，選ばれる大学と選ばれない大学に分別され，中には定員を確保できずに消滅していく大学もでてくると推測される。

こうした危機感から，各大学は生き残りをかけて，教育・研究に加えて地域貢献を柱として，学生の確保を目指して戦略的競争を激化させている。これらの戦略の1つとして，スポーツを用いた地域貢献を進めていこうとしている大学が散見される。このムーブメントは，より具体的に言うと，大学が保有するスポーツ資源，ヒト，モノおよび知識情報を用いて，地域住民に健康や活力を提供して，地域に貢献しようというものである。このスポーツによる大学と地域の連携を強化する背景には，概ね，以下に示したような理由が考えられる。大学が地域と連携する理由として，特に①および②に記したことは大いに意味があると思われる。

- ① 大学と地域社会との協力関係が構築されている否かが，大学の評価基準の1つに上げられていること。
- ② 大学と地域がスポーツを通じて関わりを持つ姿は，教室での講義に比べて，ダイナミックであり，マスメディアにとっては格好の材料となり，結果的に大学にとっては宣伝効果が期待できる。
- ③ スポーツ振興法によるスポーツ振興基本計画の目標である2010年までに成人の週1回のスポーツ実施率を50%にして，オリンピックでのメダル獲得を3.5%増加させるために各自治体が最低1箇所は総合的地域スポーツクラブの設立を目指すという国レベルの政策のため，健康・体力づくり，コミュニティーづくりという社会的要望のため。

大学と地域がスポーツを通じて連携し，地域住民の健康および体力を維持・増進させることによって地域は活性化する。人類が未だ経験したことがない超高齢化社会，少子化社会に突入しようとしている現代において，地域住民の健康度の向上は社会の営みを健全化するためには本質的な要因となると考えられる。一方，関連教員側は地域の種々の問題を研究活動の材料として研究し，その成果を地域に還元できる。さらに，学生側にとってはコーチング，ボランティア活動等の教育の場（インターン）となる可能性が高い。つまり，研究・教育・地域貢献という重要な3つの柱を顕在化させつつ大学の存在価値を社会にアピールでき，併せて大学経営および受験生確保という点でも大きなメリットがある戦略と思われる。これは，企業におけるCSR（Corporate Social Responsibility）あるいはメセナ活動に相当するものである。

本学においてもスポーツおよび身体活動を通じて地域社会に対してヘルスプロモーション（メンタルおよびフィジカル両面）を実現できるかについて検討することは興味のあるところである。そこで、本年度はいくつかの大学がスポーツを通じて地域貢献活動を行っている現状を把握することを目的とした。

慶応大学におけるスポーツを通じた地域貢献

大学と地域の交流の場を、正規の教育プログラムの効果をさらに高める場として捉えている。そこでは、スポーツ教室の開催やスポーツを支える活動としてスポーツクラブの運営事業企画立案、スポーツイベントの企画運営が行われている。この活動は、SFC（湘南・藤沢キャンパス）研究所が推進しており、地域における総合型地域スポーツクラブの設立にむけた支援活動の一環として行われている。また、大学施設を地域に開放して、地域のスポーツ組織スポーツ少年団・中・高等学校の部活動等を大学に招致して、大学スポーツ組織体育会の学生と協働でスポーツ教室を開催するスポーツイベントを行っている。このようなイベントの企画運営の過程で、地域コミュニティの様々な人々と交流し、相互学習できることが重要な点と考えられる。さらに、プロスポーツとの連携で、地域社会における健康増進、スポーツ振興を目標として多くのイベント開催を行っている。この過程では、学生の社会教育の充実、競技力向上を目的とした人材交流、スポーツ界での活動を目指す学生に実践に基づく教育機会の提供ができ、スポーツ界で活動できる新たな人材の育成等が期待できると考えられる。

東海大学におけるスポーツを通じた地域貢献

現代社会における広域的な社会貢献活動を推進する拠点として『東海大学チャレンジセンター』を開設している。チャレンジセンター開講科目は、プロジェクトへの参加を促す導入的な役割と、プロジェクトに参加あるいは参加を希望する学生にプロジェクト遂行上の基礎的なスキルを教授することを目的として、全学生を対象に開講している。チャレンジセンターでは複数の学生プロジェクトが、地域活性、社会貢献、ものづくり、国際交流などの目標を掲げながら年間を通じて活動を展開していく。その1つに『スポーツ貢献』として、学生が地域のニーズに合わせた計画を練り上げ、キャラバン隊を組織して全国的にスポーツニーズに応えていこうとするものである。これにより、学生がリーダーシップとプロジェクトマネジメントの能力を修得することを期待できると考えられる。

上記の大学以外にも昭和女子大学、岡山大学、鹿屋体育大学、群馬大学、早稲田大学、筑波大学、横浜国立大学、千葉大学、福島大学、愛媛大学、茨城大学、埼玉大学等多くの大学で独自性の高い取り組みがなされているようであるが、まだ充分なリサーチは完了していない。

今後、これらの大学についても詳細なリサーチを行い、大学が地域社会に貢献する際に望ましい方策を探りたい。次いで本プロジェクト研究のテーマである『大学が地域社会に対して有効なヘルスプロモーションを実現できるか?』について検討し、その具体的なプログラムを明確にできればと考える。

メディアの近代 ～記憶のかたち～

原 宏之¹⁾，磯崎康太郎¹⁾

¹⁾ 明治学院大学 教養教育センター

I. テレビ研究の現状

本報告では、世界におけるテレビ研究の現状と国内の問題を指摘した上で、3年目となる本プロジェクトの現状と展望を簡略に記述することとする。

世界における放送アーカイヴの先駆者はフランスの国策であるINA（フランス視聴覚院）の保存・アーカイヴ部門である。INAは大きく分けて、1. 制作部門、2. 育成研究部門、3. 保存整理部門からなる。1975年にINAがスタートしたときにはすでに、それまでの国営放送ラジオ・テレビ（民法は80年代までなかった）のアーカイヴに加えて、シネマテーク保存のニュース映画、写真などを引き継いでいた。2005年末の時点でテレビ放送に限っても62万5000時間のアーカイヴを所有しており（総アーカイヴは230万時間分の放送資料、350万点の制作資料からテレビ番組表までを含む紙媒体資料、150万点の写真）、現在のところ年間30万時間（ラジオ17局、地上・ケーブル・衛星テレビ40局）の収集をつづけている。EU委員会の諮問でも明らかにされたように、現在さまざまな数の映像・音声アーカイヴという時代の史料がアナログによる保存のため世界中で死滅しつつある。INAはこれに対応するために、アーカイヴのデジタル化を急速に進めている。

INAは、1990年代後半の一例の法令による法定納入制度や各放送局への資料提供の中継点としての地位（商業サービスの拠点）などにより保護されている。またフランスでは、放送スタートと同時に将来のアーカイヴが視野にいれられていたことも大きい。ただしこれらすべて、複雑な法的関係処理も含めて、政治主導で行われたことであり、日本の現状に照らし合わせると、資料価値を認めているのはNHKアーカイブスの試み程度であり、一国も早い対応が望まれるところである。

さて、このような状況にあり、大学内の付属研究所による1プロジェクトができることは限られている。予算の問題から、記録すべき資料の取捨選択がまず第一に求められる。今年度より、NHK・BS1の世界のニュースを編集した番組（「今日の世界」など）を中心に、史料的价值を高める方針にした。継続的に録画できる容量はこれに限られており、その他ドキュメンタリー番組を中心にアトランダムに追加で記録保存するという作業がつづいている。

資料検索の要となるインデクシングの技術については、現在フランス・ポンピドゥーセンター開発のLignes de tempsの活用を、研究パートナーである東京大学石田英敬研究室（「知恵の樹」）の好意により、検討中である。

本年度のプロジェクト進行中に、HDDの故障により保存された記録の一部が失われるというアクシデントが生じた。早急に堅牢なバックアップ体制を整えなければならないが、大容量HDD（NASとそのバックアップ先HDD）はいまだ高価であり、今年度の予算ではかなえられなかった。次年度に最優先で補強することになる。

また地上デジタル放送の開始にともなう機器の刷新、記録装置の増加など、いずれも予算がかさむ課題が山積している。

II. 文化学としての記憶研究

記憶研究は、文化研究の一研究領域にとどまるものではなく、その本質的な構成要素であると言われている。1990年代以降の、いわゆる「文化研究のルネサンス」は、この時期に学際的に行われた記憶の形態と機能をめぐる議論があってこそ成立したものである。その理由として、一方で90年代以降の文化研究に対する要請そのものが、精神科学の刷新としての学際性を求めていたことが挙げられる。他方で、記憶という研究領域は、神経学や認知心理学等の分野での議論がその発展に大きく寄与しているように、そもそも学際的に展開せざるをえない分野であることが挙げられる。文化研究と記憶研究の双方の要請は、学際性という点で一致する。そこには、第二次世界大戦の生き証人が消えかけたという実情、またコンピューターの「メモリー」をめぐる議論等、時代的な要請も見られ、これは必然的に記憶研究を促すことになった。

磯崎は記憶研究として、学会での口頭発表および論文を手がけた。まず2007年4月4日にエジプトのカイロ大学で催された「第二回国際ゲルマニスティック会議：越境の道筋：ゲルマニスティックの視角」(II. Internationaler Germanistik-Kongress: Wege über Grenzen: Perspektik der Germanistik)において、「記憶概念と<フィクション>：アルヴァックスとフロイトにおける幼児期の回想」(Gedächtniskonzepte und „Fiktion“: Kindheitserinnerungen bei Halbwachs und Freud)というタイトルで発表を行った。この発表では、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックス(1877-1945)とオーストリアの精神分析医ジークムント・フロイト(1856-1939)の著作に見られる、記憶の虚構性についての記述を検討している。社会学者として記憶の集合性を唱えたアルヴァックスと、患者個人の内面の問題から記憶を考察したフロイトは、対極的に理解されている。しかし、両者は文学作品を好んで分析対象として取りあげ、文学に描かれた幼年期の記憶から、記憶の不確かさ、虚構性を指摘している点において認識が共通する。このことをアルヴァックスが述べている集合間の接触、交流という観点から考察すれば、例えば外国人としてドイツ学に携わる者であれば、自らの「家族の記憶」というべき母国の文化を可変的で不確かなものとみなし、それを反省的に眺める材料としてドイツ学を活用することになる。「第二回国際ゲルマニスティック会議」の全体的なテーマである、ドイツ学の越境、学際的な展開の模索との関連においても、アイデンティティを形成する集合的記憶のもつ虚構性、不確実性という観点は、ドイツ学の新たな活用に

つながると考えられる。この口頭発表を加筆、修正し、『カイロ・ゲルマニスティック研究』（Kairoer Germanistische Studien）に寄稿した。

2007年12月には、オーストリアのウィーンで開催されたINST主催の学会「社会の知、創造性、変形」（KCTOS: Wissen, Kreativität und Transformationen von Gesellschaften）において、「創造性と記憶の文化」（Kreativität und Gedächtniskulturen）というセッションを設け、司会を担当した。このセッションは、「文化研究としての記憶と想起の問題」を扱いたく、「記憶がさまざまな形で対象化された文化の実例報告」をしてほしいという趣旨のもとで、発表者を公募した結果、同地で12月8日に計7名が発表、聴衆との活発な議論がなされた。磯崎も「集合的記憶の虚構性と創造性——モーリス・アルヴァックスのフロイト受容について」（Fiktivität und Kreativität des kollektiven Gedächtnisses – Zu Maurice Halbwachs Freud-Rezeption）というタイトルで発表を行った。この発表では、アルヴァックスのフロイト批判をおもに取りあげ、虚構性、創造性等、記憶に関するいくつかの属性を検討している。アルヴァックスはフロイトを批判する際、想起が過去を正しく再現する点を自説の論拠にしている。記憶術が示す通り、想起は過去と整合する側面を持ち、また過去から連続する意識の流れが自己同一性を支えるという点からも、このアルヴァックスの論拠は首肯されよう。しかし、晩年のアルヴァックス自身も想起の不確実性を認めているように、現在における再構成としての想起には想像力が介在するため、理性的・科学的立場から言えば、そこには虚構が混在する。文化的生産性の観点から言えば、記憶はとくに芸術等の分野で創造的な力になりうるが、「無意識の記憶」（*mémoire involontaire*）は、自発的な想起とは対照的である。トラウマに例証されるような「不自由な」記憶は、創造の源泉になるとは限らない。この発表内容は、近々寄稿予定である。

明治学院大学 教養教育センター紀要『カルチュラル』には、「想起をめぐる集合・夢・イメージ—アルヴァックス『記憶の社会的枠』の学際性」を寄稿した。アルヴァックスの作品『記憶の社会的枠』をおもに取りあげ、この作品に見られるフロイトの精神分析学、ベルクソンの哲学についての記述を検討している。両者は批判に晒されている一方で、アルヴァックスの集合的記憶論が、それらの基礎づけのうえに構築されていることも分かる。個人の記憶は、それが夢想であれ、失語症の場合であれ、どこかで集合性、すなわち集合的準拠枠とそれが具体化した形での「慣例」の影響を受けている。この主張は、精神分析学、哲学、社会学といった複数の分野を横断して導き出されているため、現代の記憶研究の学際性の要請にも応えうると考えられる。

Section 3

事業の進捗状況・成果の概要

● 明治学院大学秋学期公開講座報告

テーマ：「グレートワークス ～世界を変えた20世紀の偉大な業績～」

2007度の教養教育センター主催の明治学院大学公開講座は、さまざまな学問分野において、また、わたしたちの一般生活において、それまでの価値観、世界観を劇的に変化させることにつながった偉大な業績を各回取り上げ、各分野の専門家の方々にお話をいただきました。

例えば、ヒトゲノム計画に代表される遺伝子に関わるさまざまな発見は、人間の健康維持と病気治療に劇的な技術革新をもたらすこととなりました。しかしながらその一方で、その技術が人の誕生と死をめぐるきわめて重大な倫理上の問題を、わたしたちに突きつけていることもまた事実です。「偉大な発見」によってわたしたちの世界がどのように変貌し、そしてそれが現在のわたしたちの生活にどのような問いを投げかけているのかについて、大変興味深い講演が行われ、成功裏に終わりました。以下に明治学院大学秋学期公開講座の日程および各公開講座の要約を示しました。

開催期間： 9月29日～10月27日

場 所： 5号館 520番教室

第1回 9月29日(土)「フロイト 愛することと働くこと 今フロイトを読んでみると」
講演者 明治学院大学 心理学部心理学科教授 佐野直哉

第2回 10月 6日(土)「生まれつきの言語能力の研究：チョムスキーが拓いた新境地」
講演者 明治学院大学 文学部英文学科教授 佐野哲也

第3回 10月13日(土)「ヘボンの仕事：100年前の日本語革命」
講演者 明治学院大学 教養教育センター教授 嶋田彩司

第4回 10月20日(土)「歴史と現代—マックス・ウェーバーの眼差し」
講演者 東北大学教授 柳父圀近

第5回 10月27日(土)「遺伝子技術と社会：ワトソンの業績と功罪」
講演者 明治学院大学 社会学部社会学科教授 柘植あづみ

フロイト 愛することと働くこと 今 フロイトを読んでみると

佐野直哉

(明治学院大学 心理学部)

1. はじめに フロイトとの出会い

私は1969年(昭和44年)に大学院を修了して山梨県の精神病院に就職した。私の臨床家としてのそして精神分析家としての旅立ち出会った。ここに一冊の本がある。『フロイト選集第15巻 精神分析療法 日本教文社』である。本の裏表紙には1968年3月7日購入とある。この本はフロイトの精神分析療法の技法に関する論文をまとめた本である。本は装丁もぼろぼろになり本文にはあちこちに線が引かれ書き込みがされている。私はその後精神分析家として数多くの論文や本を読んできたが心理療法の基本的なことはすべてこの本の中にあると思っている。だから大学で私のゼミに入った学生が最初にテキストとして読むのがこの本である。学生たちは1年間この本に接してフロイトの世界に入り込んでいく。もちろんフロイトの論文は多岐の領域に渡り文化論、芸術論、時代評論、人間論にわたり、その論文10000ページになるといわれているがそのほとんどはフロイトの臨床における体験から生み出された思索であり考察であった。その意味でフロイトは基本的には生来の心理療法家であったといえる。

フロイト以降69年が経っているがフロイトを原点とした様々な理論や技法論が発表されている。それらはより洗練されておりより精緻に書かれている。そして多くの現代の心理療法家たちは現代的な理論に学問的興味を示している。その理論的発展の原点であるフロイトの原点を参照しない、あるいは読んだことのない若い心理療法家が増えているという現象が起きている。現にフロイトの著作集が購入者が減り廃刊になるという事態も生起している。現在フロイトの論文集は『フロイト選集 日本教文社』『フロイト著作集 人文書院』が刊行されており前者は現在廃刊になっている。更に最近『フロイト全集 岩波書店』が刊行され始めた。私は心理療法家としてクライアントの個人的歴史を重視するように精神分析的技法論についてもフロイトの原点からどのように理論的に張ってしてきたかその理論的変遷を学ぶことでより精神分析療法に対する理解が深まると思っている。フロイトに回帰することの重要性を特に強調したい。

さて私は臨床家フロイトとの出会いを通してフロイトとのかかわりが始まった。もちろん現在実施されている多くの心理的療法においてフロイトの影響を考慮に入れないでは考えられないほどフロイトの影響は深く広く及んでいる。しかしフロイトの現代に及ぼす影響は単に心理療法の技法のみには限定はできない。その影響は大げさに言えば「人間観」「倫理観」「価値観」にまで及んでいる。フロイト自身、精神分析理論を地動説を唱えたコペルニクス、進化論を唱えたダーウィンに比して第3の革命とされています。そのくらい近現代の人間にとっては衝撃的な理論だったといえます。今日ではし

ばしばダーウィン、アインシュタイン、マルクス、マックス・ウェーバー等々と並べて論じられ、時としては「20世紀はフロイト主義の世紀だ」といわれることもあります。

フロイト (Sigmund Freud) は1856年5月6日に当時オーストリア・ハンガリー王国に属していたモラヴィアの小さな町フライベルグに生まれました。父のヤコブ・フロイトはユダヤ人の商人でした。最初の妻とはすでに成人した二人の息子があり40歳のとき19歳のアマリー・ナターンゾーンと再婚をしてこの二人の間に翌年生まれたのがシークムントでした。一家は産業革命に影響で父の仕事の業績が悪化したことと、ユダヤ人への反感が強まり住みにくくなったフライベルグを離れて一時ライプツイヒに住んだ後定住地のウィーンに移りました。

ウィーンでの一家の生活はきわめて困窮したものでした。しかし両親はシークムントにより教育を与えようと最大限の努力をしました。いくつかのエピソードが残っています。ウィーン大学医学部に首席で入学したシークムントは医学生としての科目には怠慢でむしろ、哲学、心理学、生物学生理学などに熱心でした。そのために卒業は3年遅れてしまいました。そのごジークムントは八目うなぎの神経系細胞に関する研究を行いました。しかし尊敬していた恩師ブリュッケ教授から研究を続けてもシークムントがユダヤ人であることで教授に離れないことを告げられ大学を去り臨床医としてウィーン総合病院神経科に勤務することになりました。予断になるがこの頃のフロイトを描いたジョン・ヒューストン監督の『フロイト 隠された情熱』という劇映画を最近見る機会があった。フロイトは名優モンゴメリー・クリフトが演じていた。この映画でヒステリーの患者を演ずる俳優に関して面白いエピソードをした。はじめ監督はこの役にマリリン・モンローを考えたがその当時精神分析療法を受けていたモンローは治療者であったラルフ・グリーンソンやアンナ・フロイトに反対されて断念したという興味あるエピソードがあった。フロイトの患者をモンローが演じたらどのような感じになるか想像が膨らむのは私だけではないだろう。

2. フロイトの理論

1) 無意識的精神過程の存在

『無意識』という言葉は現代の私たちは抵抗無く用います。しかし19世紀末の時代には『無意識』という概念が余りありませんでした。近代の人間観では『人間は動物と違って自分のことはほとんど解っているのだ』という人間観が主でした。その人間観に対してフロイトは全く正反対の人間観を提出したのです。つまり『人間には自分でも解らない「無意識」という心の部分があり、その無意識によって人間は支配されているのだ』というものです。当然当時の学会や社会からは猛反発をされました。人間の人格形成や癖や行いは『無意識』のよって決められているということです。この当時の人々の反発に対してフロイトは『無意識的精神過程』が存在する証拠をいくつか挙げました。それらは a) 失錯行為、いわゆる「言い間違い」「書き間違い」「度忘れ」などのことです。私たちもこのような「しくじり行為」はよく行います。通常その際に私たちは「つい間違えた」とか「うっかり

間違えた」ということで納得してしまいます。ところがフロイトはその「つい・・・」とか「うっかり・・・」ということ認めませんでした。フロイトは「私たちの言動には必ず原因がある」と考えたのです。フロイトは例を出しています。ある会議で開会の宣言をすべきときに「つい」閉会の宣言をしてしまった議長の例です。「閉会の宣言」という結果に対しては「本人も意識していない早く会議を終わりにしたい」という願望があったということです。このように私たちの言動には必ず原因と結果という構造があると考えました。この考えを『心的因果論』と呼びました。b) 後催眠暗示。催眠である指示、たとえば「窓際に行って窓を開けて席に戻りなさい」という指示をすると被催眠者は自分がなぜそのような行動をとっているのかわからないままに指示に従います。このように人間には自分でも理解できない心の働きをすることがあるとしてフロイトは『無意識的精神過程』が存在する証拠としてあげました。c) 夢の分析。私たちは毎晩夢を見ます。しかし朝目覚めて意識する夢は荒唐無稽で理解ができません。フロイトは夢には本人が朝意識する「顕在夢」とその根底にある「潜在内容」があると考えました。潜在内容は無意識であり願望や欲望に満ちています。その潜在内容をそのまま意識してしまうと私たちは不安になったり恥ずかしくなったりしてしまいます。そのために潜在内容に対して様々な「加工・修正」が加えられます。例えば「象徴」とか「置き換え」などです。「ペニス」というと恥ずかしくなりますが「バット」というと大丈夫です。「人を殴りたい」というと不安になりますが「ゴルフクラブでボールをたたきたい」というと安心して意識できます。このように夢には無意識を「加工・修正」する『夢の作業』があると考えました。d) 症状の意味。例えば過食症の人は決して菓子パンやスナック菓子が好きでたまらなくてたくさん食べているわけではありません。行為としてあるいは症状としての「食べる」ということの意味は初めは治療者もクライアントも判りませんが分析をしていくうちにその意味が解ってきます。ある事例では「おなかに沢山貯めたいのは食べ物では無くて母親の愛情や暖かい気持ち」であったということがわかってきました。

フロイトはこれらのような証拠を挙げて人間に表面に現れた行為や症状の背後には本人にも気づいていない無意識の世界が展開しているのだと主張して、その暗黒の世界を探索して知っていくことこそが人間にとって大切なことでありそれが人間的なのだと考えました。

2) エディプスコンプレックスの概念

フロイトはたくさんの患者の精神分析療法を行いました。そして多くの患者の連想の中に「同性の親を亡き者にして、異性の親を独り占めにしたい」というないようなことが語られることに気づきました。そしてこのテーマがギリシャ悲劇の「エディプス王」の話と共通することからこの願望を『エディプスコンプレックス』と名づけました。それでは男児と女児におけるエディプスコンプレックスの経過を説明して見ましょう。

《男児のエディプスコンプレックスの発展経過》

- (1) 母親への非性的依存の段階。
- (2) 母親を性的に独占したという願望を持つ段階。

- (3) 母親を独占している父親が邪魔になる段階。
- (4) 母を独占しようという願望に対して父親から威嚇される。これを去勢威嚇と呼んだ。
- (5) 去勢威嚇に対して母を独占することを断念して、父親のようになり父がするように母親を愛しようとする。その過程で父に同一化をする。同一化家庭を通して父の男らしさを取り入れ性同一性が確立される。さらに父の超自我、つまり道徳観や倫理観を取り入れ自分のものにする。

《女兒のエディプスコンプレックスの発展経過》

- (1) 母親への非性的依存の段階。
- (2) 男子との性差を気づくようになり、いままで何でもくれていた（おっぱいでも、愛情でも、優しさでも）母親が「ペニス」だけくれなかったと思い母親からの離反をする段階。
- (3) そして父を独り占めしたいと思うようになる段階。
- (4) そして女兒は次の3つの方式でエディプスコンプレックスを通過する。
 - イ) 失ったペニスの代わりに子供を産む。ペニス=子供という心的等価物と考える。
 - ロ) 一切の性差を否認する。
 - ハ) 一切の性的活動を拒否する。

さて、フロイトのエディプスコンプレックス論は男性優位の理論であると批判されている。特に女性のエディプスコンプレックス理論は1970年代多くのフェミニズム運動家に徹底的に批判された。私は多くの女性クライアントの心理療法を通して女性のエディプスコンプレックスの通過過程には「母から離反した女兒が再び今度は母を性的な存在としてではなくて、優しさや柔らかさをもち様々なものを創造する存在と見てそのような創造的母親に再同一化することで母親の女性性をとり入れる」のだと考えている。

またフロイトのエディプスコンプレックス論は西洋のキリスト教文明を基本にしているといわれる。それに対してわが国の古沢平作は仏教説話を基にした『阿闍世コンプレックス』を提起した。古沢は1932年に『罪意識の二種（阿闍世コンプレックス）』をフロイトに提出した。古沢は「・・・エディプスの欲望の中心をなすものは、母への愛のために父を殺害することにある。阿闍世の父の殺害は決して母への愛欲のその源を発しているのではない。・・・むしろ母が自己を裏切ったとの阿闍世の怒りに発している。」阿闍世は父の死に後悔の念に駆られて全身の皮膚病にかかるが怒りを向けた母からの献身的な看病によって救われる。古沢はこの罪悪感を『懺悔心』と呼んだ。フロイトの言う罪悪感は、父に対する敵意に対する父からの復讐・処罰への恐怖の内化されたものである。それに対して古沢の『懺悔心』は母に向けた敵意に対する復讐・処罰が予期に反して与えられずその罪が母によって受け入れられ許されたときに起こる自発的な「悪かった」という気持ちに根ざした罪悪感である。

古沢の弟子である小此木啓吾は阿闍世コンプレックスをキーワードにして日本人の心性の精神分析的な解明を行った。また古沢の理論は現在でも読み継がれている日本人論に

おける名著「甘えの構造 土居健朗」にもつながっている。

3) 死の本能論

フロイトは『本能二元論』を提起した。「生の本能」と「死の本能」の二つが人間の根源的な本能としてあるという考えである。「死の本能」については「快感原則の彼岸 1920」で次のように述べている。「あらゆる生物は内的な理由から無機物に還るという仮定が許されるならばあらゆる生命の目標は死であるということになる。」またこのようにも述べている。「生は死への迂回路である」とも。

この時代は人類初めての大量殺戮戦争であった第一次世界大戦への悲しみと絶望の気持ちから人間における根源的な破壊衝動の存在を考えたようである。しかしフロイトは「死の本能」についてはそれほど積極的に主張していなかった。この本能二元論フロイト逝去後精神分析学会の中で「死の本能」を認めるかどうかで大きく二つの学派に分かれるような大問題となった。この問題は人間の根源的な本能として人間が生まれながらにして「死の本能」の派生物である破壊性や憎しみや恨みや羨望を持って生まれるのか、それとも人間の根源的な本能は優しさや共感や癒しを求めるのかという大げさに言えば人間をどのようにとらえるのかという議論にも発展することである。いづれにしても臨床的には「死の本能」の派生物である攻撃性、破壊性、恨み、憎しみ、羨望や「生の本能」の派生物である性欲動、甘え、共感、癒しなどをどのようにとらえるのかは臨床的には重要な課題である。

4) 精神分析における『性』について

いまだに「精神分析はあからさまに性について論じる」とか「赤ちゃんに性的な願望があるはずがない」と半ば眉をひそめて語られる。これらの批判はフロイトがウィーンで精神分析を発表した100年前と何も変わっていないという感じを私は持っている。フロイトは『精神性的発達論』を提示した。有名な人間の発達は体の器官を通して性的な表れをするという理論である。それによると人間の発達は口唇期、肛門期、男根期、潜在期、性器期という段階を経るというものである。ここで先に述べた「生まれたばかりの赤ちゃんに性欲があるはずが無い」という反論がされる。しかしフロイトは大変用心深く論文を書く人でよくその論文を読むとその反論は的外れであることがわかる。フロイトは性的 (sexual) ということばと性器的 (genital) という言葉を厳密に分けて使っている。赤ちゃんが母親の乳首を加えて満足しているのは「性的」な欲望を満足させているからである。成熟した男女が性行為によって満足しているのは「性器的」な欲望を満足させているからである。だから先に記した反論が的外れであるということとはよくわかると思う。また「乱暴な分析について 1910」では次のように述べている。「われわれはむしろ好んで精神的性欲という言葉を用いるのであり、この性生活の精神的要素を見落としたり、過小評価しないという点を重視するのである。われわれは性sexualitätという言葉でドイツ語の《愛する lieben》という言葉と同じように広い意味に用いるのである」と。

5) 臨床家としてのフロイト

a) フロイトの臨床論文

フロイトの臨床家としての姿を伝える臨床論文は先に述べた様に1904年の「フロイトの精神分析の方法」から亡くなる直前の遺稿とも呼べる1938年の「防衛過程における自我の分裂」まで約16編がある。

b) 精神分析療法の臨床的特長.

1920年頃フロイト自身が執筆したある百科辞典にフロイトは次の3つの特徴を満たしていれば精神分析療法といえると述べている。

① 無意識的精神過程の存在を認める.

先に述べた様にいくつかの証拠を列挙して無意識的精神過程があることを証明した。

② 幼児期体験の重視.

一人のクライアントを理解する際にその人の現在のあり方や問題だけでなく、そのクライアントの出生から現在までの対人関係や体験した出来事、特に幼児期における親子関係の有り方を重視して理解する。つまり一人の人間存在を歴史的存在と考え過去に体験された心的外傷が現在においても反復再現されるという考えを基礎においている。一人の人間の現在の人格や症状は過去の体験や対人関係に強い影響を受けていると考えている。このような考え方から精神分析にお

いては特に精神発達論の研究が精力的に行われた。Freud・S, Freud・A, Erikson・E・H, Blos・P, Mahler・M・S等の発達論がある。

③ 治療においては転移・抵抗を操作する.

転移 (transference) は精神分析療法における最も重要な治療概念である。精神分析においては現在の病気の原因を過去の心的外傷に想定する。最も効果的な治療は過去に戻りその心的外傷が起きないように防ぐことであるがそれはできない。その代わりに過去に体験した外傷状況における不安、怒り、不信、絶望、恨み等などの感情はその人の内面に取り入れられその後もあらゆる場面で表明される。特に治療場面において治療者に向けられる治療状況には不合理な感情を転移と呼んだ。つまりその人が過去の病因となるような外傷状況における感情状態が治療場面で反復・再現されることになる。この状況を転移神経症とよんだ。つまり過去に戻って体験を修正することは不可能であるが、『今・ここで here and now』におきている感情や行動や態度を操作することは可能になる。その操作を通してクライアントは今まで思い込んできた対人関係における不信感や怒りや恨みが修正されることになる。この機序を『修正感情体験』と呼んだ。

フロイトが創始した精神分析療法は厳密には週4 - 5回の面接を寝椅子を用いて有料で、また外来診療で行う。しかしわが国では様々な理由から現在では週1回、対面法で行われるのが通常である。これはわが国だけではなく世界的な趨勢になっている。

このようにフロイトを紹介してくるとフロイトは大変几帳面な性格で何よりも真実を追究することを重視していたことがわかる。このことはフロイトの治療者としての治療態度に明白に示されている。私の師であった故小此木啓吾先生は精神分析的心理療法における治療者の治療態度をフロイト的治療態度とフェレンティ的治療態度に分類した。フロイト的治療態度とは

- a) 臨床的個人主義 個を尊重して一人のクライアントに定期的に何年もの多大な時間を費やすという治療姿勢に具現されている。
- b) 合理主義 真実を重んじ精密さ、厳密さ、誠実さを重視して治療者、クライアント双方が自己の真実を探索していく姿勢。
- c) 対話的協力 言語的コミュニケーションを重視する。治療者の非指示性、受動性、傾聴の態度を重視しながら、《クライアントの連想に対する治療者の了解ないし構成の伝達》——《クライアントのそれへの主体的反応》——《治療者の主体的反応》という相互の試行錯誤的な対話的協力過程を基本にする。
- d) 精神内界主義 行動化を抑制してクライアントの無意識内容の言語化し洞察を目指す態度。
- e) 医師としての分別 心理療法はあくまで職業的役割関係の範囲で行われるべきで必要以上の尽力的配慮（Boss・M）を排除する。

このようなフロイトの治療態度には様々な批判もあった。この治療態度のアンチテーゼとして生まれたのがフェレンティ的治療態度といえる。しかしフロイト以降生まれた多くの心理的治療法の基本はこの治療姿勢にあるといえる。

さて、臨床家としてのフロイトの治療姿勢を見てくるとこれは単に「治療者に求められる姿勢」というだけでなくフロイト自身の人間観が垣間見えてきます。実際フロイトは大変几帳面な性格で、毎朝8時に床屋を呼び髭をそり、9時から面接を開始し50分面接して10分休み次の患者に会い、それを毎日10人近い患者との間で繰り返していたといえます。そして夜は食事の後に記録の整理、論文執筆に夜中まで費やしたといえます。

臨床家としてのフロイトは論文の中で次のようなことを書いています。《……特に精神神経症にとっては他のいかなる医療よりも精神的影響のほうがはるかに受け入れやすいものだという事実であります。これらの病気は薬が癒すのではなく、医者がいやすのである。つまり、医者が自己の人格によって精神的な影響を及ぼすという意味で医者の人格が病気を癒すのだということです 精神療法について 1905》またこのようにも行っています《……たしかに精神分析療法は患者に対しても治療者に対しても、いろいろ高度の要求を課するものであります……もし骨の折れる厄介な方法を用いれば簡単で容易な方法よりもはるかに多くのことを達成できるとすればどんな理由があろうと前者のほうが正しいのであります 精神療法について 1905》

さて字数も尽きてきた。最後にフロイトの短い論文を取り上げて終わりにしたい。

6) おわりに《不気味なもの 1919》をめぐって

フロイトのあまり読まれない短い論文に『不気味なもの 1919』がある。この論文で

フロイトは「Das Unheimliche 不気味なもの」という言葉をラテン語、ギリシャ語、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語意味を調べてドイツ語における語源的意味を分析している。「Heimlich」はもともと「よそよそしくない、馴染みの、打ち解けてくつろげる、故郷をしのばせる」などの意味がある。「Un-」は否定語である。しかしフロイトは詳細な分析を加えて「Heimlich」という単語が反対語であるunheimlichという反対の意味と重なり合う意味を表すということを指摘している。その場合《馴染みなものが不気味なもの》となる。つまり、秘密に隠されたままにとどまっているべきなのに現れ出でてしまったものは全て不気味だということである。日常的に慣れ親しんだものの中に潜む非日常的な、あるいは抑圧して意識したくないものが潜んでいるというフロイトの冷徹な人間観がここに示されている。ここに私はフロイトが人間の万能的、楽天的な幻想を破壊して冷徹に科学者として人間を見つめる姿勢を読み取る。このことはフロイトの次に示す書簡に見ることができる。《私がオプティミストであるということはありません（しかし、私はペシミストでもありません）ペシミストと違うところは悪とか馬鹿げたこととか無意味なことに対しても心の準備ができていたという点です。なぜなら、私はこれらのものを最初からこの世の構成要素の中に数え入れてしまっているからです。断念の術さえ心得れば人生も結構楽しいものです

ルー・アンドレアス・ザロメ宛書簡 1915年7月30日》《私は生涯の大部分を人類の幻想を破壊することに費やしてきました ロマン・ロラン宛書簡 1923年3月4日》

フロイトがJung・C・G, Rank・O, Ferenczi・S等と激しい対立や葛藤を体験したことは周知のことである。そのような葛藤の末に到達した人間観なのであろうか。

フロイトが「人生の目的は？」と問われて『愛することと働くこと Lieben und arbeiten』と答えたことはよく知られている。表面的な意味でも深い意味でも『愛することと働くこと』が現代ほど求められている時代はないのではないだろうか。物質的な豊かさに寄りかかり心の豊かさや癒しを根源的な意味で問い直さなければならないと思うのは私だけではないだろう。人間の尊厳をもう一度捉え直して誠実に真摯に人間存在の意味を考えなおすことが現代の課題であろう。フロイトが100年前に唱えたことは人間性の復権であり、精神分析療法が単なる治療技法としてではなくて人間性復権をめぐる運動であったといえる。最後にフロイトが好きだった言葉を挙げて終わりにしたい。『波にもまれて、なお沈まず』。

参考文献

- | | | |
|-------------------------|---------|------|
| 1. 「フロイト選集 第15巻 精神分析療法」 | 日本教文社 | 1969 |
| 2. 「フロイト全集 第17巻 不気味なもの」 | 岩波書店 | 2007 |
| 3. 「フロイト その自我の軌跡」 小此木啓吾 | NHKブックス | 1973 |
| 4. 「フロイト精神分析物語」 | 有斐閣 | 1978 |
| 5. 「新版精神分析事典」 | 弘文堂 | 1993 |

生まれつきの言語能力の研究：チョムスキーが拓いた新境地

佐野哲也

(明治学院大学 英文学科)

アメリカの言語学者、ノーム・チョムスキーは20世紀後半に言語研究において新たな境地を拓いた。それまでの言語学は言語におけるさまざまな特徴をなんらかのかたちで分類するにとどまり、どのような分類がよりよい分類なのかという基準は欠けていた。チョムスキーはそのような言語研究にとりくんだ末に、それまでの研究成果に満足できず、「なぜ子供は言語獲得において直接教えられていないこともみにつけることができるのか」「なぜ子供はどのような自然言語でも容易に獲得できるのか」という疑問によりよい答えをあたえる分析がよりよい言語分析なのだという基準にそって研究をすすめることにとりくみ始めた。

「なぜ子供はどのような自然言語でも容易に獲得できるのか」という疑問に答えるために、チョムスキーは彼の母語である英語をそれまでになかった新たな視点で分析した。それは、「ヒトは母語に関して適格な文と不適格な文を区別する能力を持っている」という視点である。例えば、日本語において、下の例文(2)は(1)と同じ単語からなり、語順は異なるが(1)と同様の意味をもつ適格な文である。

(1)ねこがいぬをおいかけた

(2)いぬをねこがおいかけた

しかし、下の(3)は(1)と同じ単語からなるが、日本語として意味をなさない不適格な文である。

(3)*がねこおいかけたをいぬ

母語話者（ここでは日本語話者）はこのように文が適格かどうかを判断する能力をもっている

このような文の適格性判断をする能力を調べることで、チョムスキーは「ある言語で、適格であってもおかしくないはずなのに不適格である文を、その言語の母語話者は教わることなく不適格と判断できる」という事実をつぎつぎに発掘した。ここで、日本語の例を一つあげると、下の(4)–(6)の例文で(4a)と(4b)、(5a)と(5b)は同様の意味に解釈できるが、(6a)は(6b)と同様の意味に解釈できない。

- (4) a. 2匹のうさぎがおしてるよ.
b. = うさぎが2匹おしてるよ.
- (5) a. 2匹のうさぎをおしてるよ.
b. = うさぎを2匹おしてるよ.
- (6) a. 2匹のうさぎにのってるよ.
b. ≠ うさぎに2匹のってるよ.

(6b) は (6a) とは異なり、「うさぎの上に何か（べつなもの）が2匹のっている」という意味にしかならない。このような知識は直接教えられないと考えられるのにもかかわらず、大人の母語（ここでは日本語）話者はみなこの知識をみにつけている。

このような観察（チョムスキーの場合はおもに英語の観察）をもとにして、チョムスキーは「そのような能力は生まれつきのものである」という主張を展開した。その主張には当初反発も大きかったが、チョムスキーの具体的な成果の説得力によって、その後彼の意見に賛同する言語学者はどんどんふえてゆき、現在までに得られた彼の主張を支持する成果は甚大なものになっている。

公開講座講演では、このようなチョムスキーの「生まれつきの言語能力の研究」を、日本語の例をあげながら紹介し、参加者にヒトが持つ言語能力の豊かさを体感していただくことを通じて、チョムスキーのなしたことの意義について解説した。

ヘボンの仕事

嶋田彩司

(明治学院大学 教養教育センター)

I 平文先生

ヘボン (James Curtis Hepburn/1815~1911) が徳川末期~明治初期の日本において果たした役割については、すでに多くの考究が備わっている。それがヘボンという一人の人間の全人的な働きであったことは、ヘボンの教えを受けた後の外務大臣林董の次のような言に端的に示されている。

話が港の外人居住者の事に及ぶと、君子とはヘボンのような人のことだと博士が引き合いに出された。当時外国人は一般に侵略者と考えられていたのに、ヘボン博士がこうした名称で呼ばれたのは、すでに彼の接した日本人の尊敬を得ていた証とすることができる。

今回の市民講座では、ヘボンの業績を大きく4つに分けて概観し、そのなかから特に『和英語林集成』の成立に関わる諸問題を取り上げ、ややくわしく論じた。

◆ヘボンの仕事1、医者として

戸部浦の漁師(略)眼病を患い(略)ヘボンと戸部にて出逢ひ、眼病を癒しやるべしとて僅に一点の薬水にて忽ち痛み止め申候。右の次第漁師共の間に伝はり、一方ならず評判に御座候。(略)或は切支丹宗の一派かとも疑ひ候得共、更にその動静も相見え、実に珍しき異人に候。(神奈川の名主が奉行所に提出した「異人聞書」より)

横浜の俗謡に「ヘボンさんでも草津の湯でも恋の病はなおりやせぬ」と歌われたように、献身的な医療奉仕はヘボンの真骨頂であり、やがて名医の評判を得ることとなる。彼の診察は基本的に日本人のみを対象とするものであり、しかもあからさまな布教活動をおこなわなかったために、近隣住民の信頼を得ることができた。

◆ヘボンの仕事2、教育者として

文久2(1862)年、幕府の委託により9名を教えることからヘボンの教育活動ははじまる。教え子には大村益次郎等がいた。ヘボンは教え子たちについて、「非常に勉強家で熱心であった。そしてその英語は長足の進歩であった」と述べている。また、幕府の「横浜英学所」(ヨコハマアカデミー)でも教鞭をとった。ここでは、益田孝、三宅秀等が教えを受けた。

同3(1863)年には、ヘボン夫人が林董に英語を教授する。これが「ヘボン塾」のはじまりである。教え子には高橋是清等がいた。近代日本黎明期の俊英たちがヘボン夫

妻の薫陶を受け、官民間わず国家建設の礎を築いたわけである。ヘボン夫妻が不在の間（上海滞在、帰米）はメアリー・ギダーが引き継ぎ、やがてジョン・バラに運営を委ねるようになる。ヘボン塾は、その後、東京築地に移転（築地大学校）し、他校と合併して東京一致英和学校となり、さらにはブラウン塾等がもとになった東京一致神学校等とも合流して、明治20（1887）年に明治学院が開校されることとなる。ちなみに、第一期生として、島崎藤村が入学している。

◆ヘボンの仕事3、聖書和訳者として

ヘボンの聖書訳は、明治5（1872）年に馬可（マルコ）伝福音書、約翰（ヨハネ）伝福音書等をブラウンとともに日本語訳したことにはじまる。その後、同7（1874）年に、滞日諸派を結集して「聖書翻訳委員会社中」を結成し、同12（1879）年の新約聖書翻訳完成・出版にこぎつけたのである。その功績を詩人の上田敏は「よくもかかる雅訓の文をなししかと驚歎せしめらる」と評価している。なお、同20（1887）年までには、旧約聖書の翻訳もなしとげられた。日本キリスト教史に果たした彼の功績は大きい。

◆ヘボンの仕事4、辞書編纂者として

亜米利加の医師ヘボンと申す者、日本の言葉少しく覚えたる趣にて、日本人に出逢へば片言まじり、いろいろと手真似して甚だ可笑しく見受け候。（先掲「異人聞書」）

『和英語林集成』の編纂は、上記の医療・教育・聖書訳等々のヘボンの仕事と不可分な地平にある。それはヘボンが日本を知り、日本人と誠意をもって交わろうとした精神の所産である。彼は庶民の日常語、古語・文語、新時代の造語を蒐集した。また「平家物語」や「膝栗毛」なども参照された。ヘボン自身が、「大部分が著者自身の読書と、人々の会話に用いられる語においた」と述べる通りである。その意義について、W.E.グリフィス（1870～日本滞在）はつぎのように述べている。「この辞書はその後作られた他の全ての辞書の土台となった」（『ヘボン 同時代人の見た』より）。

Ⅱ 和英語林集成

◆国語国字問題

徳川末～明治期の日本にとって、国語と国字をどのように定めるかは喫緊かつきわめて重要な問題であった。その嚆矢は慶応2（1866）年、近代郵政の父とされる前島密による徳川慶喜への建白書「漢字御廃止之議」とされる。前島は阿片戦争における清の敗北に危機感を抱き、漢字・漢文の廃止、仮名文字・口語体の採用を提唱したが、これがきっかけとなって諸家の論争をまきおこした。

たとえば森有礼（1847～1889）は日本語廃止論を展開し、『日本の教育』において、外国で通用しない日本語を棄て、世界に君臨する英語を国語とすべきだと主張している。これについては多くの賛同を得ることができず、江戸語を基礎として標準語が定

められ、近代日本語の誕生をみることとなるが、国字については、1、漢字と仮名の併用、2、仮名のみで表記、3、ローマ字の採用等々と種々の意見が交錯し、決着をみるのが困難な状況にあった。

◆ヘボン式ローマ字

明治7(1874)年、西周の「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」等を契機として、羅馬字会が明治18(1885)年に結成された。ここにおいて採用されたのが、和英語林集成編纂過程において確立されたヘボン式ローマ字であった。しかし、その後、日本語のローマ字表記はヘボン式ローマ字か日本式ローマ字かで、対立が生じることとなる。両者の違いは、ヘボンが英語の発音に準拠してヘボン式ローマ字を考案したのに対して、物理学者田中館愛橋が五十音に依拠した日本式ローマ字を考案したことによる。

余談ながら、両派の対立をうけて、昭和12(1937)年に公的に定められたのが、訓令式ローマ字である。第二次大戦後、再びヘボン式が隆盛となり、混乱が生じたため、1954年に日本式をもととする訓令式を正式のものとするのが告示された。ただし、現在でも、外務省・道路標識・駅名標はヘボン式であり、ヘボン考案のローマ字書式は現在なおたしかかな命脈を保っている。

◆ヘボンの態度

ヘボンは上記のような国語国字に関する論争のさなかにあつて、表だった意見表明をおこなっていない。和英語林集成には、古語、新語が縦横に採集され、それがヘボン式ローマ字で表記されるとともに、所謂歴史的仮名遣も併記されている。英語辞書という枠を超えて、当書は新旧日本語の総合的な国語辞書という趣を呈している。

土岐善麻呂はいう。

ヘボンの辞書が、英語研究者に与えた貢献も大きいが、それよりも重要な業績は「よき日本語」を選出提示したことである。(略)ヘボンの辞書を抜くと、随所にすぐれた純正な日本語が選んである。

正確に言えば、ヘボンは正しい日本語を提示したわけではない。日本語の全体像を示しただけである。そこからなにを採るべきか、それは日本人が選択すべきこととして、彼は自らの判断をさしはさまなかったということであろうか。そうであるなら、この礼節をわきまえた態度は、所謂文化侵略とは対極にあるものとして銘記されるべきである。冒頭に記したように、ヘボンが「君子」と称賛されたという事実も、辞書編纂に臨んでのヘボンのスタンスと通底するものと思われる。

◆なお、講座では明治学院大学図書館作成の和英語林集成デジタルアーカイブを利用して、和英語林集成の各版を閲し、近代日本語生成の一面をさぐってみた。この点について、当報告では記載を割愛する。

「魔術からの解放」と現代 —— 歴史を見るウェーバーの眼差しをめぐって ——

柳父 圀近

(東北大学 大学院法学研究科・法学部)

I 「魔術の園」からの解放

マックス・ウェーバーは二〇世紀前半のドイツで、現代の社会科学の基礎を造った人です。とりわけ「西欧近代で“徹底的な合理化”（そのひとつの現れが「近代資本主義」ですが）を進める文化・社会が生じたのは、どういう諸条件の組み合わせの結果だったのだろうか？」と言う問を立て、ヨーロッパ史との比較のためにインドや中国の歴史もあつかった『宗教社会学論文集』全三巻を書いて答えを出そうとしました。

この仕事の中でウェーバーは「魔術からの解放の歴史」と言うことを論じています。といいますのは、そうした徹底的に合理化が進められる社会と言うものは、まず、いろいろなタブーに満ちた呪術的な世界・呪術的タブーに支配されていてうっかり何も出来ない社会——これがすなわちウェーバーの言う「魔術の園」Zaubergarten なのですが——が打破されていなければ出現し得ないからです。本日はこのウェーバーの言う「魔術からの解放」について少しお話し、また、その内容を多少膨らませて、自分の非力を顧みず、現代社会についてもすこしだけ一緒に考えてみたいと思います。では、まず彼の言う「魔術からの解放」とはどういうことなのか、大づかみに説明することから始めてみましょう。

ウェーバーによりますと人類はいずこでも原初的には、種々の精霊や鬼神の支配する世界（「魔術の園」＝呪術的な世界）に生きていました。呪術的世界では、人に益と害悪とをもたらすのは精霊や鬼神の恣意によると考えられていて、人々はその「おめぐみ」や「たたり」に一喜一憂してくらしていたと言うのです。大づかみに言えば、このような世界から人間がいろいろな段階を経て自由になり、合理的な思考を手に入れてゆき、近代に至り主体的な文化や社会を形成するようになることをウェーバーは「魔術からの解放」と呼んだのです。

もちろんウェーバーは、こうした「魔術からの解放」が非常に進んだのは、なかんずく近代の西ヨーロッパの歴史だと考えていました。ただしそのほかの世界では「魔術からの解放」は決して進まなかったなどと考えていたわけではなく、例えば中世から近世にかけての日本の歴史の場合にも、かなりそうした事実を指摘しています。そしてそのことと、明治以後の日本の「近代化」との関連性なども指摘していて興味深いのですが、今は立ち入りません（それに日本の場合には簡単でない事情もありました）。それはともかく、とりわけ西欧近代では精霊や鬼神をおそれないばかりか、合理的な理由もないのに、「それは昔からの仕来りだから」とか、「それは神聖なものとしてされているから」といって恐れ入ってしまうような心性（これらも一種の「魔術の園」です）か

らも解放された、主体的で合理主義的な人間が現れたとウェーバーは論じました。

さて、マックス・ウェーバーによりますと、上述のような「魔術からの解放」は、ヨーロッパ近代史の上ではルターに始まるプロテスタンティズム、とりわけカルヴァンの影響を受けたピューリタニズムによって推し進めたところが大きかったというのです。考えてみれば当たり前ですが、呪術的世界からいきなり現代科学やテクノロジーの世界が出来るわけではありません。ヨーロッパの場合、歴史的にはプロテスタンティズムとくにピューリタニズムが、きわめて「反呪術的」で、種々の呪術を徹底的に排除していったとウェーバーは言うのです。

ルターに比べてもカルヴァンはきわめて透徹した論理を展開する能力に恵まれた人でした。そこでカルヴァンは彼の信念だった「神の超越性」と、この宇宙に内在している森羅万象とを峻別する鋭い神学を体系だてて展開しました。その結果、一切の「被造物」は神ではないとされて非神格化され、したがってまた「非神秘化」されることになりました。いわゆる「被造物神格化の拒否」の精神です。そして興味深いことに、まさにここからカルヴァン派ないしピューリタンにおいては自然科学へのつよい関心が育つことになったのだとウェーバーは指摘しています。「魔術からの解放」を推し進めたピューリタニズムという「宗教」（宗派）が、「科学的合理主義」を育んだというのはウェーバーが発見した歴史上のひとつのパラドックスです。例えば、当時の絶対王政下のイギリスでは、王様に触ってもらうと瘰癧などの病気が治る、などと王様の神癒力が信じられていたのですが、それは迷信（むしろ政治的な神話）であり、また王を神格化して絶対王政を強化するものであって大変よろしくないといふピューリタンは批判しました。引力の法則のニュートンもピューリタンの系統で、神学の本まで書いています。

さきほど一言しましたが、ウェーバーは日本の場合についても、このピューリタニズムのもとでの呪術批判＝「魔術からの解放」に似たものを、たとえば鎌倉仏教・特には親鸞の思想の場合に見ています。ちょうどプロテスタントの場合と似ていて——時代はルター、カルヴァンよりずっと前の十二世紀の鎌倉時代ですが——、親鸞の浄土真宗はその超越的な弥陀信仰を徹底することにより、一種の「被造物神格化の拒否」の精神を貫くことになり、少なくとも当初の真宗は呪術を批判し、呪術的権威を持っていた当時の国家権力の非神聖化をも説いています。道元らの禅宗全集についてもウェーバーは同じことを指摘しています。ウェーバーの『ヒンズー教と仏教』の中に十三ページに及ぶ日本論がありますが、そこに鎌倉仏教関係のことなどが論じられています。

II 合理化されたはずの世界で

話を西欧に戻しますと、西欧社会はその後しだいにプロテスタンティズムから離脱してゆきました。いわゆる「世俗化」が進み、とくに「主知主義」の発展とともに十九世紀後半からはいよいよキリスト教倫理からの離脱の傾向が強まりました。ウェーバーの名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はこの問題を経済倫理に関して論じたものです。

ウェーバーは、近代の「政治」や「経済」や「学問（主知主義）」や、また芸術やエ

ロスの世界も、キリスト教倫理からしだいに離れて独立していったと見ていますが、それは大雑把には事実でしょう。こうして、原初的呪術と言う意味での「魔術」からの解放だけでなく、高度な神学を備え、ヨーロッパ史を導いてきたキリスト教からも相当「解放」された、実質上無宗教な人々がたくさん出現してきました。まして二〇世紀ともなれば、政治も経営も、学術も芸術もまたエロスの世界もそれぞれが「固有の本質」ないし「固有の法則性」を持った領域として、キリスト教から独立し、また相互にも独立した領域としておのおのの道を驀進するようになったとウェーバーは論じました。

ちなみにウェーバーより一世代若い、カール・バルトと言う20世紀の有力なプロテスタント神学者がいました。バルトは、こうした「固有の法則」に従って驀進するようになった諸領域の力を「あるじなき力」と呼んでいます。もはや神を知らず、神につかえることを知らず、自己中心的にどこまでも驀進するニヒルな力だということです。「主人持ちでない力」と言うことは「自由」だと言うことだともいえますが、しかし人間がこの力を容易に「自由に」支配しコントロールできるわけではないのです。例えば科学技術の発展は、「ここで止まろう」と言って驀進を止められるようなものではありません。

その意味でたしかに後期近代の人間は、そうした「あるじなき力」に引きずり回されるという「非合理」に直面せざるを得なくなってしまったともいえるのではないのでしょうか。ここにいわゆる「近代人の自己疎外」といわれる問題状況も生じてきたのです。上述の驀進する「あるじなき力」のもとでやむなく特定の「役割」（たとえば官吏なりという）を演じている人の場合の「自己疎外」の意識状況です。（歴史家の大塚久雄は、群集がなだれを売ってある方向に動き出すと、その中にいる人は、危ないから踏みとどまろうと思っても、もうみんなと一緒に動いてゆくほかはなくなる、これが「疎外だ」と論じています。本当はとどまっていなければと思っている人の、やむを得ずみんなの動きに巻き込まれる動きもまた、群集の動きを強めることにもなってしまうという不自由な事態です）。

Ⅲ 新しい「多神教の世界」

いったんは、古い「魔術の園」から解放され、さらにはプロテスタンティズムからも「解放」され、無際限の「自由」を得たはずの「近代人」が、いまやこうした種々の「あるじなき力」すなわち「市場のメカニズム」や、「政治の力学」や、「学術の主知主義」等に、あるいは芸術やエロスの「固有の法則」に仕えるようになったのだと言うわけです。これらの諸領域が分化を遂げましたので、現代人は人生に失敗しないためには、それらの領域の中で、その固有法則のどれかにしたがって働き、それに仕えて生きてゆかねばならなくなったのです。

しかし今お話しましたような、「固有の法則」に従って驀進してゆく諸領域——政治の世界、経済の世界、主知主義の世界、さらには美やエロスの高揚を追及する世界などの、その「固有の法則性」ないしその「本質」は、いまや現代人にとってあらたな「神」のようなものとなりました。ウェーバーはこうした新しい「神々」をさして「新しい多神教」の時代が来ているとのべています。（いっそう詳しく言えば、もち

ろん、たとえば「政治」と言う領域を例にとれば、「ドイツ」のナショナリズムとか、「フランス」のナショナリズムとか、あるいは社会主義とか、リベラリズムというように、ウェーバーの言う「新たな多神教の神々」はさらに種々差異化されえます）。ウェーバーは、ある「神」を選ぶと言うことは、それ以外の「神」と戦うことになるのだぞ、と容易ならぬ覚悟を促しています。

実は、ウェーバー自身は、脱キリスト教の立場に立つ人でした。ですから、「新たな多神教」を肯定していました。いまや自由な主体的意識にたつて、自分の人生の「神」を選ぼうといいました。それだけに人が自由に選んだ神様が、「デモニー」となってその人を食い尽くす可能性についてはあまり語っていません。

しかしこのように考えてきますと、二〇世紀の人間は、大昔の「魔術の園」とは別ではあるがひとつの新しい「魔実の園」の中にまた連れ込まれてしまったのではないかと言う印象さえ生じるのではないのでしょうか？しかも二〇世紀には人間に種々の政治的ヴィジョンを教唆する様々な「イデオロギー」や「政治的神話」も種々掲げられました。これらの政治思想も新たな「神々」であるのは間違いありません。悪い例を挙げますが、ナチズムの経典のひとつであるA・ローゼンベルクの著書はいみじくも『20世紀の神話』と言うものでした。また20世紀には洋の東西を問わず実にたくさんの怪しげな新興宗教、カルトが出現しました。ナチズム前期のドイツなどでも大変なものです。このようにぐるっと見回しますと、長大な歴史の時間をかけた、ウェーバーの言う「魔術からの解放」のプロセスは、一回りしてもう一度「魔術の園」に戻ってしまったのではないかとさえ言いたくなるような気がします。

IV 新たな「魔術からの解放」をもとめて

あえて歴史的条件を無視した高飛車な言い方をすれば、原初的な「魔術の園」と二〇世紀の「神話の園」に共通しているのは、「批判精神の欠如」に他ならないといえるでしょう。原初的な場合にはまだ思考が未発達だったからですが、現代の場合は、「科学的」な思考が発達したのにもかかわらず新たな神々に支配されているのです。新旧のあらゆる「神々」に距離をとり、何事かを絶対化してしまわない精神、「20世紀の神話」などにはいかれない精神、しかしまた、ただカメレオンのように場面ごとに人格が変わるような正体なき者となることもない、そうした批判的な合理主義の精神は、どうすれば再確立できるのでしょうか。

この問題は大きな問題ですし、いま立ち入ることも出来ませんが、かつての「魔術からの解放」の歴史の中から示唆を汲むことは出来るのではないのでしょうか。無限なもの、超越的なものへと心を開くこと、それが、有限なもの、超越性を持たないものの世界に「神」を見てしまわないために大切なのではないのでしょうか。またカメレオンにならないためにも大事なのではないのでしょうか。必ずしも歴史上のキリスト教や仏教のことを言っているわけではありません。

しかしこれはやはりわれわれ現代人にとって大きな宿題ではないのでしょうか。

ご静聴を感謝します。

遺伝子技術と社会： ワトソンの業績の功罪

柘植あづみ

(明治学院大学 社会学科)

「ワトソン」という名前を聞いて、ジェームズ D. ワトソン (James D. Watson) を思い浮かべるのは、生命科学に造詣が深い人だろう。しかし、半世紀前に発表された彼の業績と、その後の彼の数々の仕事は、今日の私たちの生活に大きな影響を与えている。その業績は、まさに、グレートワークスと呼んで良いものだと考える。

ワトソンが生まれたのは1928年のアメリカである。15歳でシカゴ大学に入学し、インディアナ大学大学院にて生物学を専攻して22歳で博士号を取得した。1953年、24歳でDNAの二重らせんモデルを共同研究者のフランシス・クリックとともに発見し、25歳に威信のある科学雑誌NATUREにわずか1ページの簡潔な論文として掲載された。その業績を基にして、1962年に34歳でノーベル賞生理学・医学賞を受けた。

ノーベル賞はフランシス・クリックとモーリス・ウィルキンスと共に「核酸の分子構造および生体における情報伝達に対するその意義の発見」に対して授与された。つまり、生物の体内にあるDNA（デオキシリボ核酸）と呼ばれている物質の分子構造が二重らせんであることを明らかにし、DNAがいかに生体内の情報伝達の役割を担っているかを説明したことである。簡潔にいうと、ワトソンとクリックが示したDNAの二重らせん構造モデルは、親から子どもへと遺伝形質が伝わるのが、いかに伝わるのかを鮮やかに説明するものであった。この発見によって、遺伝学は飛躍的に発展し、医学や薬学、農業その他の産業にまで技術革新をもたらした。それだけではない。DNAという専門用語は、一般用語のようにマスメディアに頻出し、「生命の設計図」「生命の本質」「世代を超えて伝わる重要なもの」という比喩として使われる。つまり、遺伝子の概念を大きく変えたのである。

ここでは彼の「偉大な」業績とその功罪について考えてみたい。ただし、私は彼の業績を手放しで称賛しようとは思わない。その理由についても説明していきたい。

1. 生命を物理と科学の言葉で読み解く

エンドウ豆を用いた遺伝の観察実験からメンデルの法則を発見した修道士グレゴリー・メンデルの論文は1866年に印刷公表されたが、その先見性ゆえに評価されず、1900年に「メンデルの法則」の再発見がなされるまで正当な評価を待たなければならなかった。その1900年以降、わずか半世紀のうちに、遺伝に関する研究は、細胞レベルから分子レベルへと進展した。

1950年ころまでに、T.H. モーガン、F.J.グリフィス、O.アベリーらの研究の蓄積から、遺伝子が細胞内の染色体に存在することや、DNAが遺伝情報を伝えることなどが示されていた。しかし、DNAという高分子がいかにして複雑な遺伝情報を伝えること

ができるのかは大きな謎だった。そこで、ワトソンとクリックが、遺伝情報を伝達するDNA分子は二重らせん構造をとるという分子構造モデルを発見したことにより、遺伝の謎の多くが説明できるようになった。

ワトソンは、ノーベル賞を受賞した理論物理学者E. シュレーディンガーが著した『生命とは何か』（シュレーディンガー 1951）を読んで生物学を専攻するようになったこと、そして、彼の研究の目標を「生命を物理と科学の言葉で読み解く」ことであると繰り返し述べている（ワトソン 1986, ワトソン, ベリー 2007）。つまり、彼は、いわゆる生き物に興味を抱いて生物学を学ぶというより、生命現象を化学と物理の言葉に還元して理論的に説明することに関心をもった人であったといえる。

早熟な天才というだけでなく、ワトソンのもうひとつの特徴は、言動が率直で奔放であり、かつ政治的な駆け引きに長けているということである。彼の学問的な興味だけでなく、彼の性格は、その後、ヒトゲノムプロジェクトの立ち上げに尽力し、辣腕をふるったことにも連なっていく。彼の回顧録を読むと、その彼の性格が激しい科学研究の競争を勝ち抜くために大いに役立ったことがわかる。

2. 「ぬすまれた栄光」とジェンダー

そのことはワトソン自身も1968年の『二重らせん』の序文に「科学の進歩、またときにはその退歩は、きわめて人間臭い事柄であり、そこで主役を演じるものは、往々にして人間の個性や文化的伝統なのである」と書いている（ワトソン 1986）。その「きわめて人間臭い事柄」の中でも、きわだっているのが、DNAの二重らせんモデルの発想に直接的に影響を及ぼしたロザリンド・フランクリンとのX線解析データをめぐる確執である。

ワトソンとクリックと同時にノーベル賞を受けたウィルキンスは、フランクリンの共同研究者であったが、彼女と関係が悪く、DNAのX線解析写真をワトソンとクリックにこっそりと見せたとされる。フランクリンは1958年に37歳で卵巣がんによって亡くなっており、本人がこのことについて直接語ってはいない。その後、『ロザリンド・フランクリンとDNA－ぬすまれた栄光』（セイヤー 1979）や『ダークレディと呼ばれて－二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実』（マドックス 2005）などに、1950年代初頭という第2次大戦後間もない時代に、国際的な激しい競争の第一線にいた女性科学者が、自分の研究を貫くにはいかに困難な時代であったかや、彼女の生い立ち、国家の思惑なども含めて描かれるようになった。彼女のデータが文字通り「ぬすまれた」のかどうかはわからない。また、ノーベル賞は受賞時に生きていなければ授与されないで、夭逝した彼女の業績が評価されていたとしても受賞はできなかつただろう。しかし、女性科学者の業績が正当に評価されない時代であったことは、ワトソンたちに有利に働いたのである。

3. ゲノム解読時代の課題

ワトソンのノーベル賞受賞後の成果は、科学論文よりもむしろ科学政策や教育の分野で評価を受けた。1968年から1993年には遺伝学研究で有名なコールドスプリングハーバー研究所の所長を務め、また1989年から1992年はNIH（米国国立衛生研究所）のヒトゲノム研究センター初代所長を兼任した。ヒトゲノム研究センター所長時代には、国際的なヒトゲノム解析プロジェクトの予算を政府から支出させ、また各国政府の参画を促すことに手腕を発揮した。

ヒトゲノム解析プロジェクトについてはここで詳しく述べる余裕はないが、人間のすべての遺伝的な情報の暗号解読を目指したこのプロジェクトは、遺伝学、医学に限らず幅広い分野への貢献が期待された。ワトソンは考え方の違いから所長をプロジェクトの途中で降りたが、その後、ワトソンらが二重らせんモデルを発見してちょうど50年にあたるに2003年に、ヒトのすべてのゲノム塩基配列の解読完了が宣言された。ゲノム解読という科学的な作業に、特許権や国家の主導権をめぐる政治経済、科学者の業績競争など、「人間臭い」ドラマはここでも展開された。

さらに2007年にはワトソン本人が企業や他の研究所からの依頼に応じて、自分自身のすべてのゲノムの塩基配列をデータベース化したものを公表した。このように個人が特定できる形でデータが公表されたのは世界初である。このデータは医学研究などに大きな貢献をすると期待されている。しかし、もちろん人間を化学と物理の言葉で表す成果は良いことづくめではない。

4. 遺伝子技術の社会的課題と問題

遺伝子組み換え技術が応用されはじめたのは1970年代後半である。しかし、30年を経て安全性が実証されても、「遺伝子組み換え食品」を好んで購入する人は多くはない。農業、水産業、製薬、食品製造などで遺伝子組み換え技術は広範に用いられているが、それに対する漠とした不安は消えたわけではない。科学的に実証された「安全性」があれば消費者が安心するというわけではない。そこに科学者あるいは技術者の認識と素人の認識の差がある。しかし、このことは科学者・技術者にはなかなか理解されない。

別の例では、ゲノムプロジェクトの成果のひとつとして、いくつかの遺伝性疾患の遺伝子が特定され、検査ができるようになった。また、遺伝と環境の両方が関わるがんや糖尿病などの疾患についても、発症確率を予測する遺伝子検査が実用化されてきた。さらに妊娠中に胎児の遺伝子を検査したり、体外受精技術を用いて受精卵の段階で遺伝子の検査ができるようになっている。重い病気を発症するかもしれないという不安を解消するため、早期発見・治療を目的に導入されたのだが、それらの検査の存在が不安や葛藤をもたらすこともある（cf. 山中・額賀 2007, 柘植・加藤 2007）。2007年にはワトソンが人種差別的な発言をしたとして批判されたが、遺伝学はつねに優生的発想と隣り合わせてもいる。植物や家畜の育種と同様に人間に応用したいという欲望が生じるのだろうか。

人間の生を還元主義的なやり方で理解したことによってもたらされた恩恵と、それによって生じる新たな社会的問題について、どちらが重要であるかなど比較はできない。しかし、アリス・ウェクスラーが、深く悩んだ末に、自分にも発症する可能性のあるハンチントン病の遺伝子検査を受けないと決めたように（ウェクスラー 2003）、人間の生は科学的合理性だけでは説明がつくものではない。

それは決して遺伝学や遺伝学者だけが抱える問題ではなく、それが存在している文化・社会的背景反映しているのである。重く治療の難しい病気や障害があることへの私たちの視線、競争によって評価される人間を測るものさしなどが、反映しているのである。ワトソンの偉大な業績は、そのような視点からも批判的に評価される必要がある。

参考文献

- マドックス, ブレンダ 2005 『ダークレディと呼ばれて二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実』（福岡伸一, 鹿田昌美訳）化学同人。
- Sharon Begley “A Nobel Winner Pioneers the Personal Genome: The co-discover of the double helix is making his DNA public, pionerring the ‘personal genome.’” Msnbc.COM, Newsweek <http://www.msn.com/id/18881823/site/newsweek/page/0/> (2007.9.21).
- セイヤー, アン 1979 『ロザリンド・フランクリンとDNA—ぬすまれた栄光』（深町真理子訳）草思社。
- シュレーディンガー E. 1951 『生命とは何か—物理的にみた生細胞』（岡小天, 鎮目恭夫訳）岩波新書。
- 柘植あづみ, 加藤秀一編 2007 『遺伝子技術の社会学』文化書房博文社。
- ワトソン, ジェームズ 1986 『二重らせん』（江上不二夫, 中村桂子訳）講談社文庫。
- ワトソン, ジェームズとアンドリュー, ベリー 2003 『DNA』（青木薫訳）講談社。
- ウェクスラー, アリス 2003 『ウェクスラー家の選択—遺伝子診断と向き合って』（武藤香織・額賀淑郎訳）新潮社。
- 山中浩司・額賀淑郎編 2007 『遺伝子研究と社会—生命倫理の実証的アプローチ』昭和堂。

● FD活動報告

韓国語教員研修会 6月9日, 9月21日 横浜

テーマ：韓国語の授業内容や教授方法について

内容：韓国語教育の方法論について実際的なテーマを設け、相互研修を通して教授者の技能向上をはかる

参加者：韓国語非常勤講師, 教養教育センター長, 同主任, 金珍娥専任講師および外国語科目担当者代表

スペイン語教育公開講演会 7月6日 白金

テーマ：Una propuesta concreta para clases universitarias en Japon: Taller sobre español en marcha

内容：今後の授業の質向上のために、国際学部スペイン語使用教科書"Español en marcha"の1課を例にとり、授業計画・授業案の提示・内容の検討および参加者による意見交換を行う。

講師：Carlos Barroso (SGEL外国語としてのスペイン語教育部門コーディネーター：セルバンテス協会教員等を経て、現在はスペイン語教員養成のための様々なワークショップ等を主宰)

参加者：スペイン語教員等 (今回の研究会は公開研究会とする)

外国語・諸領域合同FD研修会 2月2日 (土) 白金

内容：I部 講演会

演題：FDと日常的教育改善－公開授業をめぐって

講師：田中每実先生 (京都大学教授・京都大学高等教育研究開発推進センター長)

II部 上記テーマおよび共通科目の運営に関連する意見交換会

外国語研修会 3月21日 (金) 白金

内容：I部 講演会

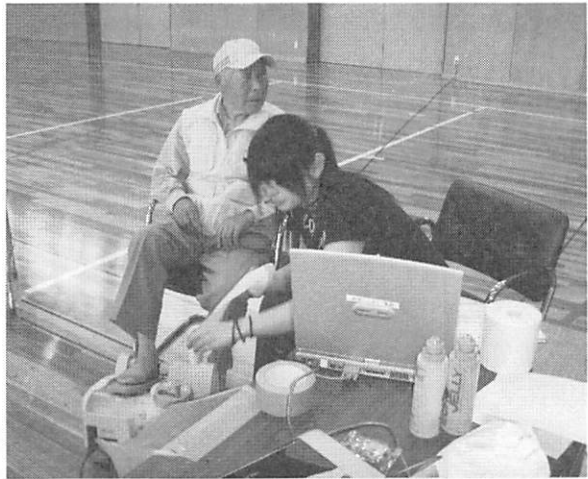
演題：外国語教育の基本的考え方 - 教室への応用

講師：吉田研作氏 (上智大学外国語学部英語学科教授)

II部 研修会

● 戸塚祭り報告

明治学院大学の学生・教職員および地域住民の方々と共に創るコミュニティー・フェスティバルとしての『戸塚まつり』が6月23日(土、日)に開催された。今年のテーマは『奏で、描け』であった。これは、参加者の方々には自身が好きなこと、頑張っていることを、来場者の方々には当日感じたことを自由に表現してもらいたいという思いがこめられているそうである。さて、教養教育センターの企画である『スポーツ・フェスティバル』は6月2日(土)に、体育館等のスポーツ施設を中心に企画・実施され、約300人の方々が参加された。この企画の趣旨は学生、教職員および地域住民の方々の健康および体力の維持・増進に資することであり、以下のようなプログラムを用意した。①体組成・骨密度測定、皮下脂肪および筋の超音波撮像、②卓球大会、③インラインスケート教室、④ゴルフクリニック、⑤テニス教室。体組成および骨密度の測定には、およそ120名の方々が訪れた。殆どの方は、ここ数年、毎年来られている方で、測定に慣れてはいるというものの1年後の自分を測定するということがやや不安げな様子で測定を受けていた。各測定とも、即座に測定結果を説明し、簡単な運動処方も行ったので測定を受けた方々にとってはかな



骨密度の測定風景



身体組成データの説明風景



ゴルフクリニックの風景

り意義深いものとなったと思われる。骨密度は高い方が骨は丈夫といえる。一般的に、骨密度と体重とは正の相関関係があり、体重と体脂肪とも正の相関関係がある。したがって、太めのヒトは骨が丈夫ということになる。体重分の重さが毎日骨に負荷として刺激を与え続けためである。しかし、太めのヒトは体脂肪率も高く、これはいわゆるメタボリックシンドローム、そして『生活習慣病』に繋がる要因となる。ウォーキングやジョギング等のスポーツ活動を行い骨に物理的的刺激を与え、骨を作る細胞を活性化させ、同時に脂肪も燃焼させ、健康な状態へと導くことが重要である。体組成の測定では、体脂肪率、筋肉の量、左右の上肢および下肢の筋肉量のバランス、基礎代謝、内臓脂肪量等多くのことがわかる。プリントアウトされたデータを受診された方々に即座に説明したのは好評であった。

卓球大会では、例年のごとく熱心な花田先生の運営とバレーボール部員の協力で円滑な運営ができていたように思う。老若男女、多くの方々が参加され終始フレンドリーに試合が進行された。

インラインスケート教室では、多くの子供達が訪れ、黙々と滑って、時に転んで、楽しんでるのが印象的であった。テニス教室とゴルフクリニックでは、リピーターの方々が多く、ビデオ撮影による打撃フォームのチェックをコーチの先生から受け、その真剣さが伝わってきた。

QOL (Quality of Life) の向上には健康であることが本質的な要因となる。生涯にわたってスポーツを行い、少しでも健康な時期を延ばしてほしいと思う。そして、このスポーツ・フェスティバルがその契機となれば幸甚です。

Section **4**

教育・研究業績の概要

池上 康夫

著書・学術論文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学術論文 「狸々覚書」	単著	2008 年 3 月 (印刷中)	『カルチュラル』 2 巻 3 号	
競技会・展覧会等の 名称	場所	開催日時	結果・成果等	
登米大鼓の会 教育活動 学生有志を引率し 能楽鑑賞	宮城県登米市	2007 年 9 月 1 日 7 月 13 日 (金) 11 月 16 日 (金) 12 月 14 日 (金)	能の囃子を通して， 地元能楽関係者と交流 鏡仙会能 <頼政><安達原> 狂言<井杭> (水道橋宝生能楽堂) 国立定例公演<実盛> 狂言<因幡堂> (千駄ヶ谷国立能楽堂) 鏡仙会能<葛城><狸々乱> 狂言<隠狸> (水道橋宝生能楽堂)	

磯崎 康太郎

著書・学術論文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学術論文 Gedächtniskonzepte und „Fiktion“: Kind- heitserinnerungen bei Halbwachs und Freud.	単著	2008 年 3 月 (刊行 予定)	In: Kairoer Germanistische Studien Bd. 17 (2008). (Im Druck)	Hrsg. von Aleya Khattab u.a.
Adalbert Stifters Me- tonymik und Natur- beschreibung in der potenziellen Medien- konkurrenz.	単著	2008 年 3 月 (刊行 予定)	Figuren des Übergangs: Ende-- Gast. Beiträge der TateshinaSymposien 2006 und 2007. (Im Druck)	Hrsg. im Auftrag der Japanischen Gesellschaft für Germanistik von Kanichiro Omiya u.a.
想起をめぐる集合・ 夢・イメージ —アルヴァックス 【記憶の社会的枠】 の学際性—	単著	2008 年 3 月 (刊行 予定)	明治学院大学教養教 育センター紀要・カ ルチュラル（第 2 巻 第 3 号）（印刷中）	
訳書 静かなまなざし —ゲーテ「前批判期」 の自然抒情詩に ついて—	単著 (翻訳)	2007 年 10 月	ゲーテ自然科学の集 い・モルフォロギア (第 29 号・76～90 頁)	ペーター・マトウセク (Peter Matussek) 著

<p>学会発表 Gedächtniskonzepte und „Fiktion“: Kind heitserinnerungen bei Halbwachs und Freud</p>	<p>単独</p>	<p>2007 年 4 月</p>	<p>Universität Kairo, Philosophische Fakultät, Abteilung für Germanistik „II. Internationaler ngress Germanistik-Ko :Wege über Grenzen: Perspektiven der Germanistik “</p>	<p>Sektion III: „Interdisziplinäre Studien: Berührungen und Überschneidungen(2)“. Sektionsleitung und Moderation: Prof. Dr. Siegfried Steinmann</p>
<p>「外国語の学習、教 授、評価のためのヨ ーロッパ共通参照枠」 (CEF) を参考に した自律的学習の 展開</p>	<p>単独</p>	<p>2007 年 9 月</p>	<p>ドイツ語教育研究会 ・第 106 回例会</p>	
<p>Fiktivität und Kreati- vität des kollektiven Gedächtnisses - Zu Maurice Halb- wachs Freud-Rezep- tion</p>	<p>単独</p>	<p>2007 年 12 月</p>	<p>INST (Institut zur Erforschung und Förderung regionaler und transnationaler, Kulturprozesse). „KCTOS: Wissen Kreativität und Transformationen von Gesellschaften “</p>	<p>Sektion 7.1.: „Kreativität und Gedächtniskulturen “. Sektionsleitung und Moderation: Kotaro Isozaki</p>
<p>シュティフターの 「近代性」とベンヤ ミンによる解釈 („Modernität “ Adal- bert Stifters und ihre Interpretation durch Benjamin) (仮題)</p>	<p>単独</p>	<p>2008 年 3 月 (15 日: 日本 語, 16 日: ドイ ツ語で発 表予定)</p>	<p>上智大学ヨーロッパ 文化圏研究所・シン ポジウム「文学にと ってモダンとは何か」</p>	

社会における活動等	
年月日	事 項
2007年4月～現在 (2003年7月より 継続)	① 学会等 日本独文学会ドイツ語教育部会教育情報委員
2007年4月～現在 (2004年4月より 継続)	日本ヘルダー学会委員
2007年3月～現在	財団法人ドイツ語学文学振興会 2007年度ドイツ語技能検定試験出題委員
2007年11月～現在	日本独文学会アジアゲルマニスト会議 2008 実行委員
2007年12月8日	INST 主催の国際会議 KCTOS (Wissen, Kreativität und Transformationen von Gesellschaften) でセクション「創造性と記憶の文化」(Kreativität und Gedächtniskulturen) 企画 (2007年5月), 座長を担当
2008年1月27日	財団法人ドイツ語学文学振興会 2007年度秋期「ドイツ語技能検定試験」二次試験面接委員
2007年4月～現在 (2004年7月より 継続)	② 非常勤講師 中央大学法学部兼任講師
2007年6月1日	③ エッセイ 「ソウルにて, ゲーテから日本人について考えたこと」, 日本ゲーテ協会『べりひて』第48号, 16～18頁.
2007年6月30日	「カイロ体験記」, 世界文学会「世界文学ニュース」No. 93, 約5000字

猪瀬 浩平

著書・学術論文等の名称，学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌（および巻・号・ページ）等の名称，学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
<p>著書 『支援の障害学へ向けて』（6章「障害者であっても，地域であたりまえに生きる」担当）</p>	共著	2007年 10月	現代書館	横須賀俊司・松岡克尚（編著）
<p>『人類学で世界を見る』（「障害：健常／障害の境界をゆさぶる」）</p>	共著	印刷中	ミネルヴァ書房	春日直樹（編）
<p>学術論文 「予後を生きる：自閉症の治療教育をめぐる未来性」</p>	単著	2007年 4月	社会臨床学会『社会臨床雑誌』（15巻1号14-19頁）	猪瀬 浩平
<p>「“偶発”的解体，“偶発”的連帯（上）：1988「埼玉県庁知事室占拠事件」における非＝同一性」</p>	単著	印刷中	社会臨床学会『社会臨床雑誌』15巻3号頁未定)	猪瀬 浩平
<p>学会発表 「“偶発”的解体，“偶発”的連帯：1988「埼玉県庁知事室占拠事件」における非＝同一性」</p>			国立民族学博物館共同研究「ソーシャル概念の再検討 — ヨーロッパ人類学の問いかけ」研究会 2007年9月29日（大阪・国立民族学博物館	猪瀬 浩平

教育・研究業績の概要

講演等 「BIG ISSUE の軌跡とこれから：路上販売活動からトータルな生活支援活動へ」（コーディネーター）			日本ボランティア学会連続フォーラム「カフェ連」	発題者（Big Issue Japan 代表 佐野章二氏）
--	--	--	-------------------------	-------------------------------

植木 献

著書・学术论文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学会発表 ラインホルド・ニー バーにおける平和 主義と現実主義	単	2007 年 5 月 27 日	2007 年度政治思想学 会 第 14 回研究会	植木 献
講演等 ICU 教会について	単	2007 年 5 月 20 日	明治学院大学キリス ト教研究所・明治学 院教会共催「キリス ト教主義 大学におけ る教会問題調査研 究」プロジェクト研 究会	植木 献

大森 洋子

著書・学術論文等の 名称、学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称、学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
<p>その他</p> <p>西和中辞典 第2版</p> <p>アクティビティで 学ぶスペイン語 -初級から中級へ- -Punto y seguido, curso de español: Nivel pre-intermedio-</p> <p>「リスニング 問題付スペイン語 語彙練習帳 -スベ単ライト-」 -El vocabulario de español en tus oídos-</p> <p>学会活動等 SELE (スペイン語 言語学セミナー)</p> <p>ワークショップ開催: 語彙習得のための アクティビティを 考える</p> <p>“Parecer” 知覚の あり方と言語現象</p>	<p>単著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2007年 8月29日 ～31日</p>	<p>小学館</p> <p>朝日出版</p> <p>朝日出版</p>	<p>編集代表 高垣敏博 (編集委員)</p> <p>Josefa Vivancos Hernández, 廣康好美, 大森洋子</p> <p>GIDE スペイン語教 育研究会 語彙研究班</p> <p>(GIDE スペイン語 教育研究会アクティ ビティ班の一員とし て)</p> <p>山村ひろみ, 大森洋子</p>

亀ヶ谷 純一

著書・学术论文等の名称，学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌（および巻・号・ページ）等の名称，学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
学术论文 世界トップレベル・バレーボール選手のスパイク動作特性	共著	2008年 3月	明治学院大学教養教育センター紀要 カルチュラル2巻1号 pp.23-30	黒川貞生，森田恭光， 亀ヶ谷純一， 加藤浩人，松井泰二， 鈴木陽一，矢島忠明
社会における活動等				
年月日	事 項			
1981年4月～現在 1985年4月～現在 1991年4月～現在 1999年4月～現在	<p style="text-align: center;">「学会活動」</p> 日本体育学会（会員） 日本スポーツ心理学会（会員） 運動生理学会（会員） 日本バレーボール学会（理事）			
1989年4月～現在 1993年4月～現在 1994年4月～現在 1995年4月～現在 2007年10月～現在	<p style="text-align: center;">「有資格」</p> 日本体力医学会，健康科学アドバイザー 国際バレーボール連盟（IF）1級国際コーチ (財)日本バレーボール協会指導普及委員会（委員） (財)日本バレーボール協会公認講師 (財)日本体育協会公認スポーツ指導員バレーボール（コーチ）			
2005年4月～現在 2005年4月～現在 2005年4月～現在 2006年4月～現在 2007年4月～現在 2007年4月～現在	<p style="text-align: center;">「社会における活動」</p> 駒沢大学評議員 港区，健康みなと推進会議（委員） 私大連，学生委員会（委員） 昭和大学横浜北部病院，臨床試験審査委員会（IRB）委員 日本学生支援機構，全国学生指導研究会（座長） チャレンジコミュニティー大学（講師）			

川俣 優

著書・学術論文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学術論文 ハルピンにおける 植民地の体験— 1930年代の文学か ら—	単著	2008年 3月	明治学院大学教養教 育センター紀要 第1巻第2号	

金 珍娥

著書・学术论文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
著書 【Campus Corean- はばたけ！韓国語】	共著	2007年 4月1日	東京：朝日出版社。	野間秀樹，村田 寛
学术论文 「韓国語のローマ 字表記法」【韓国語 教育論講座】	単著	2007年 4月25日	東京：くろしお出版 第1巻 pp.387 - 418 (総 31 頁)。	金 珍娥
講義・講演 「話す教育のために」 「談話論を中心に」	単	2007年 8月16日	韓国文化院主催，国 際文化フォーラム共 催，第4回 韓国語 教師研修会 講師	金 珍娥
その他 【Su ッ kara】 (スッカラ)	単著	2007年 8月16日	月刊誌 「マキのソウ ル物語」連載	東京：アートン

黒川 貞生

著書・学術論文等の名称, 学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌(および巻・号・ページ)等の名称, 学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
<p>著書</p> <p>Behavior of human m. gastrocnemius during explosive stretch-shortening cycle movement investigated by ultrasonography</p>	<p>単著</p>	<p>2008年 3月</p>	<p>明治学院大学教養教育センター紀要 カルチャール 2巻1号 pp.9-22</p>	<p>黒川貞生</p>
<p>世界トップレベル・バレーボール選手のスパイク動作特性</p>	<p>共著</p>	<p>2008年 3月</p>	<p>明治学院大学教養教育センター紀要 カルチャール 2巻1号 pp.23-30</p>	<p>黒川貞生, 森田恭光, 亀ヶ谷純一, 加藤浩人, 松井泰二, 鈴木陽一, 矢島忠明</p>
<p>運動時に発生する筋痙攣の要因および予防法</p>	<p>共著</p>	<p>2008年 3月</p>	<p>明治学院大学教養教育センター紀要 カルチャール 2巻1号 pp.37-42</p>	<p>大野政人, 黒川貞生, 森田恭光</p>
<p>バレーボールのブロック局面における off the ball movementsの評価に関する研究 ～大学トップチームを対象として～</p>	<p>共著</p>	<p>2008年 3月</p>	<p>バレーボール研究 (印刷中)</p>	<p>松井泰二, 内田和寿, 黒川貞生, 鈴木陽一, 佐藤重芳, 矢島忠明</p>

教育・研究業績の概要

社会における活動等	
年月日	事項
学会活動等	
1982年 4月～	東京体育学会会員
1982年 4月～	日本体育学会会員
1982年 4月～	日本体力医学会会員
1986年 4月～	日本バイオメカニクス学会会員
1990年 6月～	日本スポーツ方法学会会員
1993年 4月～	日本運動生理学会会員
1996年 5月～	バレーボール学会会員 (理事, 企画委員会委員長)
1996年6月23日	国際バレーボール連盟公認コーチ (ステージⅡ)
2003年 3月～	International Journal of Volleyball Research (USA) 編集委員
2007年度	港区明治学院大学連携 チャレンジコミュニティー大学 (講師)
2007年8月11,12日	講演およびバレーボール教室: ジュニア育成のヒント「身体と身体の動かし方」

佐藤 アヤ子

著書・学术论文等の 名称、学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称、学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表者 名等
<p>訳書 『またの名をグレース』</p> <p>講演 マーガレット・アトウッドが語る悪女の話</p> <p>演劇祭 「カナダ現代演劇祭 2007」企画 佐藤アヤ子訳『孤児のミューズたち』が Studio Life によって上演される</p> <p>学会発表 シンポジウム 「カナダ演劇の動向」</p>	<p>単著</p> <p>講演</p> <p>総合司会 コメンテーター</p>	<p>2008 年 3 月 (発行)</p> <p>2007 年 6 月 (発表)</p> <p>2007 年 7 月 - 8 月</p> <p>2007 年 7 月</p>	<p>岩波書店 上下巻 (550 頁)</p> <p>明治大学に於いて</p> <p>シアター x に於いて</p> <p>「第 25 回日本カナダ 文学会年次研究大会」 にて</p>	<p>マーガレット・アトウッド著 佐藤アヤ子訳</p>

佐藤 寧

著書・学术论文等の 名称、学会発表・講 演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称、学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学术论文 Defining the Prosodic Word in Japanese	単著	2008 年 3 月発行 予定	明治学院 教養教育 センター論叢	
学会発表 Defining the Prosodic Word in Japanese	単著	2007 年 8 月 31 日	イギリス言語学会 (at King' s College London)	
その他 学会活動 (1) 学会誌編集		2007 年 6 月	Language Education & Technology (第 44 号)	外国語教育 メディア学会 編集委員長 佐藤 寧
(2) 査読		2008 年 1 月	WorldCALL 2008 Conference	WorldCALL 学会発表 査読委員

鈴木 義久

著書・学術論文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
学術論文 ハーマン・メルヴィ ルの短編小説「幸福 な失敗」の主題	単著	2008 年 3 月	教養教育センター発 行【カルチュラル】 （第 2 巻第 2 号）	鈴木 義久

武光 誠

著書・学術論文等の 名称，学会発表・ 講演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
著書 増訂律令太政官制 の研究	単著	2007 年 7 月	吉川弘文館	武光 誠

原 宏之

著書・学術論文等の名称，学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌（および巻・号・ページ）等の名称，学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
共同研究等 「近代における情報構造」（研究代表） 著書・論文等 「言語態分析——コミュニケーション的思考の転換」		2007 年度 2007 年 5 月	科学研究費補助金 慶應義塾大学出版会	掲題の科学研究費助成研究を進め，ほか参加プロジェクト2点に協力。 原 宏之
<p>掲題単著を上梓。数年来の成果をまとめたものであるが，いささか不満も残る内容。ところが，12月東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻より同専攻初めのいわゆる論文博士として，博士号授与審査会の荣誉に授かり審査会で合格となった（審査会メンバーは，敬称略で，石田英敬，伊藤守，北田暁大，小森陽一，山田広昭，山中桂一）。本学での論文審査（対象論文は異なる）を希望していたものの受けいれられなかったこともあり，東京大学からの支援はありがたいものであった。</p>				
教育活動				
<p>秋口に紀伊屋書店の大型企画「戦後日本スタディーズ」で80-90年代の文化を担当（年内に活字になる予定）。メディア論の包括的教科書『よくわかるメディア・スタディーズ』（伊藤守編，ミネルヴァ書房，2008年度刊行予定）に寄稿。SSJJ誌（オックスフォード・ジャーナル）寄稿用の原稿の元となる研究を進める。これを発展させて，次年度秋にパリの研究機関で「近代日本思想史」「現代日本のカルチャー」の講義を行う予定。</p>				

福山 勝也

著書・学术论文等の名称、学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌（および巻・号・ページ）等の名称、学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
<p>学术论文等</p> <p>小角 X 線散乱によるポリマーブレンド繊維の炭素化過程における細孔形成と構造評価</p>	共著	2008 年 1 月	「炭素」 (炭素材料学会誌) No. 231, pp. 21-29	福山勝也, 畠山義清, 星野達朗, 大谷朝男, 西川恵子
<p>小角 X 線散乱強度から導出される距離分布関数におけるダンピングファクターの影響に関する考察</p>	単著	2008 年 3 月 (予定)	「カルチュラル」(明治学院大学教養教育センター紀要) 第 2 号 (印刷中)	福山勝也
<p>備長炭を空気極としたグルコース燃料電池の改良</p>	共著	2008 年 3 月 (予定)	「慶應義塾大学日吉紀要・自然科学」 第 44 号 (印刷中)	福山勝也, 大橋淳史, 大場茂
<p>学会発表</p> <p>酸素吸着能を有するパイロポリマーの小角 X 線散乱による構造解析</p>		2007 年 11 月	第 34 回 炭素材料学会年会	畠山義清, 福山勝也, 西川恵子, 宮嶋尚哉, 西澤節
<p>SAXS 測定によるポリマーブレンド繊維ならびに炭素化物のナノ構造評価</p>		2007 年 11 月	第 34 回 炭素材料学会年会	福山勝也, 畠山義清, 大谷朝男, 西川恵子

森田 恭光

著書・学術論文等の名称，学会発表・講演等のタイトル	単著・共著の別	発行または発表の年月	発行所・発表雑誌（および巻・号・ページ）等の名称，学会・講演等の名称	編著・著者名・発表者名等
著書 スポーツ・健康科学 テキスト	共著	2008年 3月 (予定)	(株)杏林書院	弘 卓三, 森田恭光
学術論文 世界トップレベル・ バレーボール選 手のスパイク動作 特性	共著	2008年 3月	明治学院大学教養教 育センター紀要 カ ルチュラル 2巻1号 pp.23-30	黒川貞生, 森田恭光, 亀ヶ谷純一, 加藤浩人, 松井泰二, 鈴木陽一, 矢島忠明
運動時に発生する 筋痙攣の要因およ び予防法	共著	2008年 3月	明治学院大学教養教 育センター紀要 カ ルチュラル 2巻1号 pp.37-42	大野政人, 黒川貞生, 森田恭光
社会における活動等				
年月日	事 項			
学会活動	日本体力医学会会員 日本体育学会会員 日本生理人類学会会員			
2007年7月4日	現代健康スポーツ科学研究会 呼吸循環機能測定講習会企画(鶴見大学)			
2007年9月5~7日	日本体育学会第58回大会参加(神戸大学)			
2007年5月30日	チャレンジコミュニティー大学講師 運動処方入門 ー体力測定と評価方法ー			
2007年6月23日	運動不足によるからだの変化と運動			
2007年11月10日	有酸素運動とからだづくり 楽しく安全なウォーキングの進め方			
2007年11月24日	心とからだのリフレッシュ 自然探索とコミュニケーション			

教育・研究業績の概要

競技会・展覧会等の 名称	場所	開催日時	結果・成果等
関東学生ボクシング トーナメント戦		2007年5月6日, 6月34日	監督（引率および セコンド）として参加
横浜市民大会 （ボクシング）	横浜文化体育館	2007年5月3日	
大田区アマチュア ボクシング大会	早稲田大学	2007年11月11日	
第5回オープン戦 （東京アマチュア ボクシング連盟主催）	日野自動車保健プラザ	2007年12月2日	

渡辺 祐子

著書・学術論文等の 名称，学会発表・講 演等のタイトル	単著・共 著の別	発行また は発表の 年月	発行所・発表雑誌（お よび巻・号・ページ） 等の名称，学会・講 演等の名称	編著・著者名・発表 者名等
著書 “Christian Schools and Governmental Registration: Comparative Studies of Japanese and Chinese Christian Education”	共著	2007 年	Christian Responses to Asia Challenges: A Glocalization View on Christian Higher Education in East Asia, Center for the Study of Religion and Chinese Society, Chung Chi College, The Chinese University of Hong Kong, pp.227 -251.	Philip Yuen Sang Leung , Peter Tze Ming Ng eds.
学術論文 「中国プロテスタン ト伝道研究の視角」	単著	2007 年 7 月	『キリスト教史学』 キリスト教史学会 (第61集, pp.144-169)	渡辺祐子
「パール・バックの 中国伝道論 ――近 代中国におけるキリ スト教伝道事業の自 己省察」	単著	2007 年 12 月	『中国 21』愛知大学 現代中国学会 (vol.28, pp.79-96)	渡辺祐子
「近代化とナショナ リズム」	単著 (翻訳 および 解題)	2007 年 10 月	『立教学院史研究』 第 5 号 立教大学立教学院史 資料センター (第 5 号, pp.17-32)	呉梓明著, 渡辺祐子 訳

教育・研究業績の概要

その他 アジア研究における キリスト教への新しい視点	座談会	2007年 12月	【中国 21】愛知大学 現代中国学会 (Vol.28, pp.3-26)	佐藤公彦, 武内房司, 牧野元紀, 木島史雄, 渡辺祐子
社会における活動等				
年月日	事 項			
2007年4月～ 2008年3月	キリスト教史学会理事			

編集後記

『明治学院大学 教養教育センター年報 *SYNTHESIS 2007*』を無事に創刊できて大変嬉しく思っています。本誌は、明治学院大学 教養教育センター附属研究所の年報として、今年度より発刊されることとなりました。本誌に掲載したような内容やスタイルで適切であるかどうかをしっかりと検討する時間的余裕がなく十分な編集作業ができなかったことが心残りです。所員の皆様からのご意見を頂き、年々より良き年報として育っていくことに期待をいたします。

本誌の発行に際して、ご協力とご尽力を頂いた明治学院大学 教養教育センターの先生諸氏をはじめとする附属研究所所員の方々に心より御礼申し上げます。

2008年3月

黒川 貞生

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報

SYNTHESIS 2007

2008年3月31日発行

編集代表 黒川 貞生

発行者 鈴木 義久

発行 明治学院大学 教養教育センター附属研究所

〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町 1518

電話 045-863-2067

印刷 (株) エスコム

神奈川県川崎市宮前区菅生 2 - 23



明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報

SYNTHESIS 2007